光と闇、それが世界。

神影 零緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇、それが世界。

【Ｎコード】
Ｎ１７９８Ｖ

【作者名】
神影　零緋

【あらすじ】
車に轢かれた少女が来たのは黒い空間。「転プレさせるのって意外に簡単だな」え。誰ですか？
冷静（？）少女が廻る一つの物語が始まる…
かな（（オイ。
シリアスもギャグもてんこ盛り状態です

主人公設定（前書き）

とりあえず
主人公ですかね。

設定です。

主人公設定

主人公

名前：汐海（しおうみ）　波音（なみね）

年齢：ツナと同じ。

誕生日：９月１９日

星座：乙女座

血液型：Ａ型

身長：１６４．２？

体重：３５？

出身国：日本

利き腕：右

好きな事・物：歌，植物，仲間

嫌いな事・物：自己中な人，いじめ

趣味：歌う（特にボカロ）

スキル：身体能力

好きな色：青，黒，白

瞳：青緑　カラコンで黒

髪：黒に近い青

一人称：ぼく怒ると俺

容姿：ＫＨのシオン風

性格：敬語，過去暗し

武器：異常と過負荷

属性：月＋全部

一言：「…これから…宜しくお願いします。」　堅っ！？

主人公設定（後書き）

あはは☆
何がおこるんでしょ★

ＫＨとはキングダムハーツのことですＶｖ

亀更新ですが
気長に待ってやって
おくれ～。

1．転生…ですか。

「…おはようございます」

これがぼく、汐海　波音の始まりだ。

朝ご飯を食べ、用意（鞄の中は漫画のみ）をして

「…行ってきます」

と言っても家の中は無人。

家族など、とうの昔に居ないのだが。

これで一日は同じに進む…ハズだった。

授業中は漫画を読んで…

漫画？モチロン【ＲＥＢＯＲＮ！】ですよ。

さっさと家に帰って寝て…

…とまぁこうなるハズだったんです。そう、だった。

どうなったかは長くなるんですが…

さて、ぼくの家は車通りが少なく、通学路として活用されてたんで

すが

たまたま…たまたまなのか故意になのか

車が突っ込んで来たんですよ。

的確にぼくに向かって。

「…え？」

キキィィィィ、ドンッ

とまぁ、轢かれたわけで。

どうなったかと言うと…。

今、黒い、真っ黒の空間に一人でいます。

「…どうしましょう」

…漫画入った鞄忘れてきｔａ「お、起きたか」…ん？

？「転プレさせるのって意外と簡単に出来るんだな」↑ゑ？

「…とりあえず…誰ですか？」

「あぁ、自己紹介だな。俺は神だ。名前はディオだ」

…ディオ…と言うと…

「イタリア語で神…でしたっけ」

「お。よく知ってるな」

「まぁ、【ＲＥＢＯＲＮ！】のために米・伊とかの言語系は…」

「！！その漫画知ってんのか。なら話は早い。

……【ＲＥＢＯＲＮ！】の世界に行ってくれ！」

「いいですが何故？」

「即ｏｋ！？じゃあこっちだ。来い！」

…普通にスルーですか。

「はいはい。そっちですね」

神の後ろを波音は溜め息を吐き小走りで追った。

1．転生…ですか。（後書き）

…いう事がない。

とりあえず、ボカロの
アンハッピーリフレイン聞きます。
みんなも聞いてみてね☆

2．設定完了ですね

神…もといディアが止まった先には一人の女性が居た。

？「おぉ！待っとったでぇ！」

「…えっと…？」

「こいつは「こいつって言うなや！」摘花だ。同じ神」

「無視か！…まぁよろしくな！」

「…摘花って後ろから読んだらかｍｉ「ストーーーーップ！」

「それ以上はアカンて！」

「…ここに来た理由は？「無視！？」」

「あぁ、特典を選んでもらう」

「…特典？」

「Ｌｖ．　ＵＰ！的なもんや」

「【ＲＥＢＯＲＮ！】に行くんですもんね」

「物分りが良くて助かる。まずは…武器」

「二次元の武器ならいけるで！」

「…【めだかボックス】って大丈夫ですか？」

「えっと…悪平等以外なら」

「なら…異常と過負荷で」

「ん。分かったで」

「次はスキルだな」

「…スキル？武器が十二分にスキルですが？」

「そうじゃない。動体視力、体力、攻撃力、防御力、身体能力だ」

「あぁ。そういう…」

「全部９０％まで上げる」

…すごいな、オイ。

「そのなかで２つのみ１００％にできる」

「…なら身体能力と…体力で」

「！…ほぅ。攻撃や防御を選ばないのか」

「９０までいくなら持久力を」

「おっけ。あとは…属性やで！！」

「全部…って言いたいんですが」

「が？なんだ？」

「オリジナルって出来ます？」

「「！！…」」

波音の言葉に二人は固まった。

（ん？表情がかたまった？）

「…星以外ならなんとかいけると思うわ」

「月はいけます？」

「いけるで！！」

「じゃあそれでお願いします。」

「ふむ、承った。…」

「まだ…話は残ってますよね？」

「「！！…」」

「僕が此処にきた理由は？」

「…っ！…」

ディオは息を呑む。

しばらくの沈黙。そして

「では、話すぞ」

ディアが声を絞り出すように…話し始めた。

2．設定完了ですね（後書き）

途中の波音の言葉
「摘花って後ろから読むと」
意味が分かったでしょうか？

摘花↓つみか↓かみつ↓かみつー↓神２

となります！
ちょぉっと強引過ぎたかな？

3．異常…ですか。

「あの世界に…異常（イレギュラー）がいる」

「…それは…僕みたいな？」

「違う。お前は俺が故意に連れてきたんだ」

「それは世界自体の…いわゆるバグやねん」

「つまり転プレやトリップではない…

いるはずの無いはじめからいるもの…？」

「そうだ。それを止めるには世界の中に行くしかない」

「でも神様ってゆうのは中には入られへん。…何があっても」

「外からのサポートは出来るんだが…」

「それで僕が選ばれたと」

「あぁ。その世界を楽しんでいない者を探していてな」

「…確かに。あの世界は退屈だ」

…平凡すぎて。と波音は付け加えた。

「だからお前を呼んだ」

「そうですか。納得しました。で、異常（イレギュラー）は？」

「あぁ、その説明はウチがするわ！」

「行くで。まず…それは『白川（しらかわ）　美加（みか）』」

「！女性ですか」

「せやで。で並中に通う。中二」

「２－Ａ？」

「…そうや。えっと…ボンゴレ内部破壊中…」

「！！どういう事ですか」

「俗に言う『いじめ』だ」

「…被害者と加害者は？」

「沢田君と山本君が加害者…と言っても騙されて

獄寺君と六道君とクロームちゃんが被害者やけ…ど…！？」

「！？」

突如の圧迫感に耐えられずディオと摘花は黙り込む。
その圧迫感は…波音から発されていた。
「それ…本当？」
口を開くと倒れる、そう判断したのかディオは頷いた。
「そう…ならソイツ許さねぇ。いや、許せねぇ」
波音の口調が変わっている。怒ってる合図だ。
ディオはやっとの事でその状況に慣れてきた。
摘花はすでに座り込んでいる。…微かに震えながら。
「そこでだ。お前に「分かってる」！」
結構高等のディオですら意識を保つのが精一杯のオーラ…いや、
殺気を出して彼女は言い放った。
「大丈夫。ソイツ…壊してやるよ」
少しの沈黙の後、殺気と圧迫感が消えた。
そして初めの口調で波音は
「すみません。少し切れて理性吹っ飛んじゃいましたね」

と言った。

「あ…」

ディオより下の摘花は絶えられなかったようで話せるまで少し時間がかかった。

と言っても十分で済むのだからそこはさすがに神だと思う。

普通の人なら壊れてるところだ。

「…では、行って来い」

ディオは一つの扉を指差した。黒い空間に白…いや、灰色の扉。

「行ってきます」

そして波音が扉を開けた…。

3．異常…ですか。（後書き）

最後こわいっ！

最初の方意味不だし…

敵の設定です。…チッ（前書き）

今回は敵のキャラのプロフ。

敵の設定です。…チッ

敵って程でもないｗｗ

名前：白川（しらかわ）　美加（みか）

年齢：ツナと同じ。

誕生日：４月３０日

星座：牡牛座

血液型：ＡＢ型

身長：１４３．２？

体重：４０．２？

出身国：日本

利き腕：右

好きな事：自分のコマ

嫌いな事：自分の思い通りに行かない事

趣味：人を操る事（つか被害妄想？ｗｗでいじめをする事）

スキル：マインドコントロール…と言い張っている。

好きな色：ピンク，赤

瞳：黒

髪：ピンク（染めた。）ロングでウェーブ。

一人称：ワタシ怒るとアタシ

容姿：…絵が出せたら出します。スミマセン

性格：典型的なぶりっ子。ウザイｗｗ

武器：星→二丁の銃、雨→短剣

属性：星（ウソ）ホントは雨。

一言：「コマはコマ通りに動いてねＶｖ」

敵の設定です。…チッ（後書き）

こんなもんかな。

4．家、そして学校と＋α（前書き）

久しぶりに出す…

4．家、そして学校と＋α

扉を開くとそこには

「あれ？」

…ぼくの家のリビングがありました。

試しに部屋に行くとやっぱり

「ぼくの部屋だ。この白黒（モノクロ）レイアウトは」

他の部屋も前と同じだった。

違う点は…漫画が無かったくらい。

「あれ？…封筒。しかもぼく宛…？」

中はこう書いていた。

『ディオだ。

この家は前…つまり転生前と同じにしてある。

サービスとでも思っておいてくれ。

…漫画はさすがに上から許可が降りなかった。スマン。

あと、属性の事なんだが

月＋全部にしておいた。

…が月以外は言わないほうがいいと思う。

携帯は内容がゼロの状態だ。

一つだけある電話番号は俺に繋がる。

何かあればかけて来い。

他は大体説明どおりだ。

…神として、全力でサポートさせてもらう。

なにせこんな事初めてなんだ。

あぁ、学校の手続きはしていないから

早いうちにしておくといいぞ。

何かあればまた連絡する。』

何かって何。

これが第一の感想。

「とりあえず午前九時に手続きしに行くとして」

現在七時。あ、午前。

「二時間…異常と過負荷を試しときましょう」

～飛ばして九時～

「そろそろ行きますか」

さっきはやばかった。

致死武器（スカーデット）で家壊すところだった。

「着いた。！…着きました、ね」

並中に。

…さて、中に入ったら自動的にあの人がきますよね。

でも正門入らないと…

「…行きましょうか」

あの人が来ないのを願って。

ヒョイッ

という擬音がつきそうな飛び越え方…

でしたね。ぼく。

さぁ、行こ「何してるの？」…この声は。

？「並中生じゃ無いよね。…咬み殺す！」

みつかったぁ！

4．家、そして学校と＋α（後書き）

やっとリボキャラ登場！？

最初のキャラはこの人にしたかった。

5．手続きしに来ただけなのに（前書き）

今回少し（？）

雲雀さん寄りです。

5．手続きしに来ただけなのに

「話を聞いてください！」

？「うるさいよ」

うわぁ…

この会話で分かった人はいるでしょうか。

ハイ。手続きをしにきたぼくは

……委員長と鬼ごっこしてます。

モチロン風紀委員長と。

雲雀さん強いなぁ。壁が壊れていますよ。

あ、大嘘憑き（オールフィクション）で直してます。

「ぼくは…ってうわっ！！」

パシッ！

「ワォ。あれを止めるんだ」

「ぼくは…手続きを…しに…」

「！そう。じゃあ応接室にきなよ…ってちょっと？」

ドサッ

あれ？なんでぼく倒れて…あ。意識が…

「…ハァ」

突然の浮遊感に波音は意識を手放した。

雲雀は波音を抱え応接室に向かった。

「軽い…何、この子ちゃんと食べてんの？」

「ん…？」

見慣れない天井。でも…知ってる。

此処は…

「応接室…」

「あ、起きたね。じゃあこれ、書きなよ。」

渡された紙は二枚。

「転校するための紙と…！？」

もう一枚。それは

「なんですか！これ」

「風紀委員申込書」

「いや、入りませんよ？！」

「君に拒否権は無いよ」

いや、あるから！とはつっこめなかった。

どす黒いオーラが見えたから。

「入るよね？（黒笑）」

「…ハイ」

と言う訳で両方書き終わりましたので

「多分こんな感じです」

と渡した。此処で

一つの疑問が浮かぶ。

黒曜編って終わってるのかな？

「一つ聞いていいですか？」

「…何」

オブラートが見当たらないので

「パイナップルって好ｋｉ「嫌い」…」

黒曜編は終わってるみたいですね。

「風紀委員のことは言わなくていいから」

「ありがとうございます」

「別に。もう帰って良いよ」

「あ、はい」

「…またね」

「！！ハイッッ！また明日！（ニコッ」

「！／／／／／」

波音が帰った後雲雀は呟いた。

「反則だよ…／／／」

5．手続きしに来ただけなのに（後書き）

さて、問題がひとぉつふたぁつ程。

1、リング争奪戦やる？完全オリジナル？

2、誰落ちにしようか…ふふふふ。

誰か何か意見無いですかね…。

6．委員長、恭弥との朝（前書き）

投稿おくれてすみません

6．委員長、恭弥との朝

その日はあの後何も無く眠った。
ので、次の日。
「早く起きすぎましたね…」
現在…午前４：３０。
「ひば…委員長は居てるでしょうし」
学校に行きましょう。

と、いうわけで学校。
「応接室はこっちですよね」
テコテコ…ピタ。
「スゥーハァー…よし」
突入！
「失礼します」
雲「？あぁ、昨日の君か「波音」？」

「汐海でもいいから名前で呼んで下さい」

雲「…波音、書類の手伝い。そっちの紙ね」

「！…ハイッ（ニコッ」

雲「…／／」

「なんか顔赤くないですか？委員長」

雲「…名前」

「へ？」

雲「僕が波音って呼んでるんだから君も恭弥ね」

「え…ひばりんじゃ駄目ですｋ「何それ。絶対やめて」」

「じゃあ…ひばきょーとか」

雲「やだよ。僕そんな名前じゃないし」

「分かりました。恭弥ですね」

雲「ん。じゃあ書類ね」

「はい…って多くないですか！？」

雲「うるさいよ」

～2時間後～

「お…終わった…？」

雲「うん、できてるね」

「やっと終わった～。っ！…終わりました」

雲「敬語外せば？」

「…クセ、と言うか直らないので無視して下さい」

雲「分かった。…けど」

「けど？」

雲「直るように努力してね」

「分かり…分かった」

雲「ん」

ひば…恭弥はポンと手をぼくの頭に置いた。

そして頭を撫でた。…こんなの久しぶりだ…。

雲「…どうかしたの？」

「へ、どうして…？」

雲「笑ってたから」

ぼくが笑ってた…？

「え、本当ですか？」

雲「…うん」

うわぁ、恥ずかしい…

「／／／／／」

雲「（…可愛い…）クスッ」

「わ、笑わないで下さいよ！／／／」

やっぱりこの人…

性格悪い！マンガのときもでしたけど、

本物はもっと！

雲「なんか嫌味言ってｎ「言ってません」…」

「そろそろＨＲの時間なので行きますね」

雲「あぁ、そうだね…」

雲「何かあったら僕に言いなよ」

「…」

正直いじめの方には首を突っ込んで欲しくなかったんですが。

「分かりました。そうします」

雲「そう。じゃあね」

「はい。また」

波音は職員室に向かった。

「まずはいじめを止めないと…」

そう感じながら。

6．委員長、恭弥との朝（後書き）

雲雀さんとツナに一票はいりました！

指輪戦はやるに二票入りました！

黒蝶と渚サンありがとうございました！

あ、オチはボンゴレとヴァリアーからです。

7．香水の匂いと嘘くささ。（前書き）

更新遅れてすみません…

7．香水の匂いと嘘くささ。

先「入って来い」

「失礼します」

ガラガラ

「！？」

香水のキツイ香り…気持ち悪い。

「じゃあ、自己紹介しろ」

何かと上から目線の先生が言う。

「汐海　波音です。家の事情で転校しました。

好きな物は歌と仲間。嫌いな物は…いじめです。

これからよろしくお願いします＾＾」

「「「「「よろしくー！」」」」」

「「「「「よろしくな！」」」」」

…とてもいじめの場所には見えないですね。

それが余計に悲しいのですが。

さて。あいつ…じゃないあれは…居た

「よろしくねぇ汐海さんＶｖ」

ぐ…吐くな！我慢だぼく！

「汐海の席は一番後ろ窓際の席だ」

「分かりました」

獄寺の隣か…楽ですね…

「宜しくお願いしますね」

「…」

無言の獄寺

…相当なんですかね。

早く何とかしないと…。

～休み時間～

「どこから来たの？」

「…秘密です＾＾」

「なぁこっち来いよ」

「どうしてですか？」

…これでしょうか。

「ソイツの隣とかホント可哀想」

「…何かあったんですか？」

「そいつは美加ちゃんを虐めたんだ！」

主人公だった沢田が言う。

獄寺は…

「…」

相変わらず無言。

「早くこっちに来るのな」

一緒に居てるハズの山本も波音に言いかける。

「あんまり意味が分からないんですけど」

当の本人…加害者（ひがいしゃ）は話した。

「獄寺君がぁ、『お前なんか』ってぇ…グスッ」

見せてきたのは切り傷

「…へぇ」

刃の向きどう見ても反対だし…。

「汐海さんも味方になってくれるよね？」

沢田…どこまで自惚れてる。

「そうですね。ぼくはこちら側です」

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」

手を差し伸べたのは…隼人の方。

クラス全員が目を見開く。

「なんでなのな。ソイツは…「その傷」？」

「どうみても刃の向き反対ですよね」

「！！」

白川は明らかに動揺している。

「自分で切らない限りはそうはなりません。」

「…そう。君はそっち側なんだ」

沢田は冷たく言い放った。

「ど、どうしてぇ！？「敵として」！！」

「敵として…宜しくね？」

これで…ターゲットはぼくになったはず…。

7．香水の匂いと嘘くささ。（後書き）

指輪戦はやるが４票

落ちは雲雀が３綱、骸が１です！

引き続き宜しくお願いします！

8．ファミリー結成（前書き）

少し訂正しました。

感想をくれた方々（なんとなく名前はふせますｗｗ）

ありがとうございました！！

8．ファミリー結成

「…なぁ」

誰も…否、二人以外居ない放課後の教室。

一人の男子は女子に問いかける。

「なんでしょうか」

平穏を装ってる女子は内心

（初めてしゃべった！！）

とまぁ考えていたのだが。

「どうして。どうして俺をえらんだ？」

そんな考えは一気に吹き飛ぶ。

「何故か。…ですか」

読者の皆様には分かってるだろう。

女子は波音、男子は獄寺だ。

波音は少し考えてから言った。

「ぼくはいじめが嫌いなんです」

「答えになってねぇ。どう見たって俺が…っ」

そこで止まったのは『自分はやってない』から。

「いや、どうみてもあっちが加害者ですよ。

普通一度いじめられた相手を見たら震え上がります

それにいじめられた人はなかなか言い出せないものです」

…『　』にいじめられた、なんて。

それを言わなかったのは…何故か？

それは彼女しか分からない。

「じゃあ、信じてくれるんだ…な？」

「モチロンですよ。信じてください」

獄寺は少しだけ出していた殺気を消す。

…心を開いた合図だと思う。

「…では、冷静に聞いて下さい」

フッと緊張感が教室に充満する。

「何だ？」

「君の信頼していた十代目(さわだつなよし)はいないと思って下さい。」

「!?なんで十代目を知ってる!!」

あぁ、だから冷静にって言ったのに。

「そちら側の人間なんですよ。ぼくだって」

「…そうか。それよりいないって?」

「彼は白川(あれ)に操られている…とでも」

「そういう事か…」

「だから優しい言葉を掛けられても一度ぼくを通して下さいね」

「分かった。…じゃあ、さ」

「?はい」

「今は…お前が俺のボスになってくれ」

「!?」

まさか、こんな事を言われるとは…でも

人が頼ってくれるのは…悪くないかもしれない。

「…いいですよ。でも二つ」

「？」

「一つは波音と隼人、と呼ぶこと。二つ目は…」

「…裏切らないで。絶対に」

「！！あぁ、約束するぜ」

「では、ファミリーの名前は…」

「「…」」

沈黙の中、第三者の声が聞こえた。

「君達何やってるの…って波音？」

そう、見回りに来た恭弥だ。

「恭弥！！いい所に来ましたね！！」

「呼び捨てっっ！？」

「…いやな予感しかしないんだけど」

「まぁ、そう言わずに。ね？」

強引に、というかほぼ強制的に

波音は話を聞かせる。

「へぇ…面白そうだね。僕もそれに入れてよ」

それ＝ファミリーだ。

隼人と波音は

「「モチロン！！」」

と答えた。

「でも、珍しいですね、恭弥が誰かの下につくなんて」

「…特別だよ」

「そうか…（汗」

「じゃあ後は…」

「「「名前…」」」

少しの沈黙が流れる。

「じゃあ…」

口を開いたのは恭弥。

「ネロ」

「「ネロ？」」

「そう。イタリア語で」

波音がいち早く反応する。

「！黒…ですか。いいですね」

「僕達にピッタリじゃない？」

あちらからすれば。…と言い加える恭弥。

「いいんじゃねぇか？」

「ええ。それで行きましょう！では人数も集めないと…」

誰を誘う、なんて当の昔に決まってるのだが。

「考えておきます。今日はこれで…」

下校時間どころか辺りは暗くなっている。

「ああ、そろそろ帰らねぇとな。親も心配するし」

あ。と波音が声を漏らす。

「それは大丈夫です。親はとっくに他界しました」

「「！！」」

悪い、と隼人がいう前に波音が止める。

「謝らないで下さい。少し罰当たりですけど…」

『二人が消えてくれて心の底から嬉しいんです』

真っ暗な光のない瞳。…それに笑み。

「「ゾクッ」」

二人はその波音を見た時に感付いた。

波音の過去の壮絶さに。

奥深くの悲しみ、怒り、憂いに。

だからこそ…聞かなかった。

「…そうか。じゃあ、帰るか」

「！！えぇ、そうですね」

「風紀が乱れることしないでね」

「わかってますよ」

「「「また明日」」」

三人は学校の外に足を踏み入れた。

外には真っ暗な中に月が光っていた。

まるで未来を現わすかの様に…

8．ファミリー結成（後書き）

１９日までに後一つ、

１９日に一つは絶対に書きます！

なぜかは…１９日には分かります

アンケート

リング戦　やるに

落ち　雲雀３、綱と隼人１、意外に骸２ｗｗ

まだまだ分かりませんねｗｗ

9．転校早々休みます（前書き）

１９日になってしまった！！

急げ！！

9．転校早々休みます

家に帰った波音は考えていた。

…ファミリーのメンツの事だ。

「二人には悪いですが骸は必要ですよね」

幻覚は使えた方が楽だ。それに、骸はいじめられている方。

仲間には十中八九入ってくれるだろう。それは初めから決まっている。

それとは別の話だ

「ヴァリアー戦は多分まだ」

始まってない。つまりは今なら仲間にも出来るという事だ。

波音と白川（あれ）が居る。

それに今、ボンゴレ側には『嵐、雲、霧』が居ない。

そう考えると原作通りにはいかないのだ。

百パーセント。

これが、今波音が頭を抱えている悩み。

「どうするのが正解何でしょうか」

彼女の思考回路は少し変わっている

正解を求めるなんて可笑しいのだが。

「とりあえず…」

明日は骸を誘いに行こう。できたら…二人も連れて。

そのために必要な事がある。波音は眠りについた。

ＡＭ　１：３０

スパァァァン！

「いってぇな、久々の再会だぞ？」

真っ黒な空間に２つの人影。そして鳴り響く平手の音。

「貴方に頼みがあります、ディオ」

「…そう言うのはアイツに言ってくれ」

「え？アイｔ「呼んだ？」あぁ、摘花」

「設定変更とかはアタシに任せてや！！」

「では、早速本題に…」

本題は二つあります。

そして三人は話し合ったり色々していた。

AM6：45

「あまり寝た感じがしませんね」

寝てる間も話してたのだから当たり前だ

「早々に学校を休むとは…」

今日はスカウトに行くので学校を休む。

2人を呼ぶかは分からないが

「あの2人の事ですから会うと…」

戦いそうですね。口にはあえて出さなかった。

「隼人に聞いてみましょう」

一緒に来るのかどうか。…くると言いそうですが。

「行くに決まってんだろ」

「やっぱりですか。学校は？」

「お前と同じで休む」

「分かりました。後は…恭弥、か」

一番の難関ですよね…

「なぁ、誰をスカウトするんだ？」

「行けば分かります」

「…分かった」

「では、恭弥を説得しに行きましょう」

「だな」

「行くよ。僕も」

「へぇ、説得には時間がかかると思ってたんですが」

「君がスカウトするんだ、強いんでしょ？」

「…貴方も隼人も会って事ありますよ」

…ただ

「敵として、だし相性は最悪ですが」

だって、骸ですもん。

「…もしかして…」

「あれ、恭弥分かったんですか？」

「咬み殺そ「止めて下さい。味方にするんです」…チッ」

「メリットもあるはずですよ、とりあえずは…」

牢獄から出すのが第一条件だ。

～黒曜ヘルシーランド～

「…おい、波音まさか…」

「はい、骸です。スカウトするのは」

スタスタと歩く波音と恭弥の後ろを

隼人は呆然としながら追った。

ちょうど中に入ろうとした時だ。

？「お前ら!!何しに来たんだびょん!!」

？「…めんどい」

聞いた事ある声が聞こえた。

「城島　犬と柿本　千種ですね？

クローム髑髏、もとい六道　骸に会いにきました。

骸から聞いているハズですが？」

「!!じゃあ、汐海　波音は…」

「ぼくの事です」

「…めんどいけど入って」

「隼人と恭弥もいいですよね？」

「しょうがないびょん!」

「ありがとう。では行きましょう…？どうしました？」

恭弥と隼人は唖然としながら歩き出した。

「ここだびょん」

？「…あなたが…汐海さん…？」

「はい。骸から話は…」

「聞いてる…えっと…？」

後ろの二人に説明する。

アナグラムのクロームの事

骸が復讐者（ヴィンデチェ）の牢獄にいる事。

「…（ムスッ」

若干恭弥が拗ねているのは

実体…つまり骸本人と戦えないからだろう。

「そんな恭弥に嬉しいニュースです」

「「？」」

恭弥と隼人が不思議そうな顔をした。

「とりあえず骸と変わってくれますか？」

「…分かった。…」

サアァァァ

霧がはれると其処には骸が居た。

「約束は本当なんでしょうね、波音」

「モチロンです。ぼくは嘘をつくのは嫌いですよ」

「クフフ、そうですか」

「六道　骸…」

「おや、雲雀　恭弥と獄寺　隼人」

「ファミリーですからね」

「波音、今から何するんだよ」

今までしゃべらず黙って聞いてた隼人が言った。

「へ？あぁ、そうでしたね、見てて下さい」

波音が目を瞑り何かを言う。

「カトダ、メダガ、レコカ、トダ、メダガレア、」

呪文のようなもの。

「我々ニナンノヨウダ…！！ナミネサマデシタカ」

「「「「「！？」」」」」

波音、復讐者（ヴィンデチェ）以外が驚く。

波音様という言葉に。

そしてこの次の言葉に。

「あのさ、早速だけど骸、犬、千種を釈放して欲しいんです」

「カシコマリマシタ。デモ…」

「その三人分以上の牢獄に入れなきゃならない人物リスト整理しときましたから」

「…ワカリマシタ。ロクドウムクロノカラダヲモッテキマス」

「ありがとうございます」

「「「「「…（呆）」」」」」

「！…皆さんどうかしましたか？」

「説明して。波音」

「あ。ぼくの部下…なのかな？って言う人が復讐者（ヴェンデチェ）のボスなんです」

これは、ディオのことだ。

「これはこれは…じゃあ、いじめの首謀者も…」

「それはいやなんですよ」

「どうしてだ？よっぽど簡単じゃ…！？」

突然の威圧感に襲われる。

波音だ。

「みんなをここまで追い詰めたんだ…。

俺が殺（や）らなきゃ気がすまねぇんだ」

そんな中骸の身体が届いた。

「マタナニカアレバオヨビクダサイ」

「え？あ、はい。ありがとうございました」

…先ほどの空気が嘘のように

波音は淡々と言った。

「では、骸、身体に戻ってください」

「…えぇ。わかりました」

その途端、骸はクロームになり骸の身体が起き上がる。

クロームは今までのトコロを見てないので

周りの人が固まっているのが気になったらしい。

「…？」

「クロームさん。ぼくの事は波音で良いですからね」

「あ…「敬語も」…分かった。波音」

「^^では、えーとクローム髑髏もとい凪

六道　骸、城島　犬、柿本　千種。

今から正式にネロファミリーの一員です。

これから、よろしく^^」

「…よろしく。」

「よろしくだびょん！」

「宜しくお願いします」

「…よろしくね…波音」

こうして、黒曜チームはネロファミリーに入った。

9．転校早々休みます（後書き）

とりあえず今日中にもう一つ出します

１０を特別編にしたくてここまで頑張ったんだ！！

呪文をひっくり返して読むと、ある曲の歌詞になります

１０．特別編！９月１９日（前書き）

よし！間に合ったぜ！！

キャラ崩壊＆恭弥寄りです。かなり

１０．特別編！９月１９日

「ん～…？７時…学校は休みですね」

９月１９日といえば敬老の日。

…それだけでは無いのだが波音は忘れきっている。

「今日はヒマなんですよね」

だから…

「商店街でも行きましょうか」

波音は何も考えず商店街に出かけた。

同時刻、恭弥宅。

「…なんで僕の家で…しかも群れてるし」

「しょうがねぇだろ！ここが一番家でかいんだ！」

「黒曜でやる訳にもいかないでしょう」

「…飾り…」

「あぁ、それは窓の上にお願いします」

「はい…骸様…」

ネロファミリーの全員が恭弥の家に集まってたりする。

「料理は獄寺　隼人とクローム髑髏ね」

「何故、君が指示をしてるのですか？」

「僕の家だから」

「……」

「骸様…これは…？」

「あぁ、それはあっちです」

着々と準備を進めていた。

波音は家に戻っていた。

「ヴァリアー…どうしましょう…」

いっそあの人たち…ファミリーの皆に言っちゃいましょうか…

いやでもそれは…

「……いい案が出ない…」

いやまてよ、月と星…といってもうそだけどなら

どっちかがヴァリアーに行って…とか？

「やっぱり今度会いに行きましょう…」

単独で。

…未来のことを考えていた。

ＰＭ６：３０。

ピンポーーーン

「…誰ですか…って恭弥じゃないですか」

「うん。波音今から空いてる？」

「？ハイ。空いてますよ」

「じゃあ、ちょっと来て」

「分かりました」

～恭弥宅～

「…恭弥の家じゃないですか」

「そう。入って」

「…？ハァ」

ガチャ

「お邪魔します」

「…こっち」

リビングに連れて行く恭弥。

「開けて」

「？」

キィ…とドアを開けた時。

パン！パパン！

「！？」

「「「「「「お誕生日おめでとう！波音！」」」」」」

「…（ポカーン）」

クラッカーと共に皆の声。

「あ…今日って9月19日…」

「忘れてたのかよ!!」

「すっかり」

「…とりあえず座ってください。今日の主役は貴方なんですよ」

「え、あ、ハイ」

「じゃあ始めるぴょん!」

波音達はご飯を食べたり遊んだりしていた。

「隼人とクロームご飯おいしいですよ^^」

「…チッ」

「…有難う…」

「^^」

そろそろ終わろうとしていた頃。

「…波音…」

「!!クローム!」

「これ…」

クロームが差し出したのは駅前のファンシーショップの紙袋。

中の物は…白い星がついた黒いブレスレット。

「！！有難うございます」

「…お揃い…」

クロームは黒い星のついた白いブレスレットをしていた

「…＾＾友達の証ですね」

「！…うん＾＾」

「波音！！俺らからだびょん！」

「…これ。」

犬と千種からは黒い蝶のピアス。

「お、俺は…これだ」

隼人からは銀の十字架が付いたネックレス。

「僕からはこれです＾＾」

骸はサファイアが付いたピンキーリング。

「皆さん…本当にありがとうございます」

波音は深く頭を下げた。

誕生日に祝ってもらうという習慣が…いや

覚えが無い波音にはすごく嬉しかったのだろう。

…この後、皆は帰っていった。

家に居るのは恭弥と波音。

…さて、気付いただろうか。

恭弥だけ何もあげてない事に。

「波音」

「はい、なんでしょう？」

「プレゼント、欲しい？」

「…いらないと言うと嘘になります」

「そう。じゃあ…」

その後、微かなリップ音。

…え、リップ音？

「／／／／／／！？！！？？？！？！？／／／／」

「驚きすぎ」

「へ？うぁ…」

「…（可愛い）」

「えっと…ありがとう…ございます…？」

「…（クスッ。はい。これ」

手に渡されたのは…鍵。

「…鍵？」

「そう。僕の家のね」

「出入り自由ということですか」

「そうだね。…波音

…誕生日おめでとう」

「！！ありがとうございますっ！！＾＾」

こうして、波音の誕生日は終わった。

あぁ、家に帰ると。

「…わぁ」

いつ着るか分からない黒のドレスと黒のハイヒール。

白い髪留めもセットだ。

そして「誕生日おめでとう!」と書かれた

紙が貼ってあった。

「…ありがとうございます」

波音は夜空に向かってお辞儀をした。

１０．特別編！９月１９日（後書き）

大胆っすね。恭弥。

伏線多いなぁ…

ピンキーリングは小指につける指輪です。

サファイアは９月の誕生石なので＾＾

１１．ヴァリアーにて衝撃の事実（前書き）

最近ＰＣの調子がいい。

11．ヴァリアーにて衝撃の事実

「間もなく目的地に到着します。シートベルトをお閉め下さい」

飛行機のアナウンスが鳴り響く。

え…飛行機!?と思った人、正常です。

「やっと着きましたね」

はい、ぼくはイタリアに来ました。

理由?もちろんヴァリアーに会いに来たんです。

いやぁ、色々知りたいのでね…。

白川（イレギ）　美加（ユラー）の事とか

有れば嬉しいですし、何よりもリング戦。

星…（仮）と月。戦うとしたらこの組み合わせ以外に無いだろう。

隼人を嵐に出来るかどうかも不安ですけど…。

とか思ってるうちにヴァリアーに着いてしまった。

「さて、と」

門番に話しかける

「汐海　波音と言います。ザンザス様並びに幹部の方々に話があり此処に来ました。開けてもらえますか？」

「汐海　波音…？まて、幹部の誰かに連絡を取る」

「お願いします」

１０分くらい経ってから門番が此方に言った。

「入り口で待っていろ。じきに幹部の誰かが来る」

「わかりました」

言われたとおりに入り口で待つこと5分。

？「ししっ♪お前？用事があるって云う奴」

「あ、はい。汐海　波音と言います」

「オレはベルフェゴール。ベルでいいぜ♪」

「分かりました。ベルですね」

「ん。じゃあ行くぜ。全員集まってるから」

「はい、行きましょうか」

「ああ」

ギィィ、とドアを開けると幹部とボスはもう集まっていた。

？「ヴォォォイ！おまえかぁ！」

「…うるさっ（ボソッ」

？「ムム、君が汐海　波音かい？」

「はい。名前は皆さん知ってるみたいですね」

？「あらぁ～ん、カワイイ子じゃないｖＶ私のなｍ「あ」？」

「大丈夫です。ぼくも皆さんの名前くらい分かりますよ」

「…オイ、カス。用はなんだ」

「あぁ、そうですね。えと…とりあえず…

ぼくは、一応ボンゴレ沢田　綱吉側のクラスメイトです」

「「「「「！！」」」」」

「あ、でも戦いに来たわけじゃなくて…。

ぼくをヴァリアーに入れてください」

「「「「「！？」」」」」

波音が一方的に話を続ける。

「今、こっちのボンゴレは壊滅的なんです。

嘘吐き女が星の属性とか言い出しましてとりあえず戦える状況じゃないんですよね。

で、その自称星女がいじめというまたくだらないことをしてましてね？

嵐、雲、霧が居ない。…あ、嵐、雲、霧はぼくの仲間なんですけどね

で、その自称星女を倒すにはぼくがこちら側に行こうかと思いまして。

ぼく的にも都合が良いですしね」

…噛まずにサラッといった波音はすごいと思う。

「ムム、自称星女とは『白川　美加』のことかい？」

「！！知ってるんですか！？」

「知ってるも何も…」

「ソイツなら少し前までヴァリアーに居たぜ。…逃げたけどな」

予想外の展開に波音も一呼吸遅れる。

「…言えるとこまで。…聞かせてもらえます？」

ヴァリアーの顔が少し翳ったのを波音は感じ取り『言えるとこまで』と言った。

全貌を話したのは、意外にもザンザスだった。

「…二年ぐらい前の話だ。カスが入れて欲しいと此処にきたのは」

…小学６年生と云った頃か。

「珍しい星の属性を持っている、と言った。実際にある訳ではない架空の属性だ。

ただ、属性のことをやけに詳しく話す。だから…

本当に有ると信じた振りをして仮に幹部として入れた。…弱くは無かったからな。

つい最近だ。アイツが急に言い出した。それは…

『ベルにナイフで殺されかけた』だ」

「！！！」

「ヴァリアーをなめてたんだろう。引っかかると思ってたらしいが
そんなものに引っかかる程弱くないからな、
返り討ちにしてヴァリアーを抜けさせた」
「…へぇ。ありがとうございます」
その場が一瞬にして凍りつく。…ザンザスさえも。
キレた波音の殺気に。
「やっぱりアイツは壊さねぇと…」
壊す。それはすなわち消すという事。
「じゃあ、明日も学校あるので帰りますね。
ヴァリアーに入る件、考えておいて下さい」
固まったヴァリアーを放っておいて、波音は城から出て行った。
「…」
今日の晩御飯を考えながら。

11．ヴァリアーにて衝撃の事実（後書き）

体育祭も文化祭も吹奏楽部のオレにとっては

じごくなんだよぉぉ！！

体育祭にいたってはスウェーデンリレーのアンカー。

足速くないよ！？４００ｍて…殺す気か！！（泣）

12．え？何で此処に…？（前書き）

ちょっと変えました

12．え？何で此処に…？

日本に帰ってきたのは日が変わった頃。

「さむっ…へっくしゅ」

とまぁ、くしゃみしてるのが我らの主人公波音。

「眠い…寒い…早く帰りたい…」

小走りに家に向かってたのもつかの間、今では歩いている。

「うぁぁ…ただいま～…」

なんとなくにただいまと言ってみる。

…誰もいな「「「「おかえり」」」」…

「へ？」

「帰るの遅かったね。日付変わってるよ」

「…身体…冷えてる…冷たい」

「おまえなぁ…風邪ひくぞ…？」

「イタリアまで行くのにこの格好ですか…（呆」

上から恭弥、クローム、隼人、骸だ。

「え…え〜っと、とりあえず…どっから突っ込みましょう…」

「家に居るのは僕のスペアキーで開けた」

「ボスが休んでファミリーが集まるのは当然だ」

「私達が居るのは…学校休んだって聞いて…」

「イタリアに居たのを知ってるのは空港で見かけたからです」

「…説明有難うございます」

恭弥がスペアキーを持っていることにはあえて突っ込まない。

骸が空港に居るのにも当然突っ込まない。

ハァ、と溜め息を吐く。

「貴方達はぼくを驚かせるのが好きなんですか？」

誕生日といい…（前回参照）今回といい…

「うん」「…少し」「ああ」「ええ」

恭弥、クローム、隼人、骸。

「皆…ある意味正直で偉いですけど」

そこは否定しろよ。と、思った波音。

「…波音顔赤くないですか？」

「え？そんなこと無いですよ…」

ペタっと額に恭弥の手が当たる。

「…熱い。熱あるよ」

「そんな格好でイタリアなんか行くからです」

格好はノースリーブのTシャツに半袖の薄いのを羽織った感じ。

下は短パンにスニーカー。

…風邪も引くだろうよ。そりゃ。

「部屋で寝とけ。えっと…上か？」

頷く波音に隼人は「行くぞ」と言って二人で上がっていった。

～10分後～

降りてきたのは隼人。

「寝たぜ、アイツ」

「じゃあ、帰ろうか」

「そうですね。夜遅いですし」

「…骸様…行こう」

「そうですね。クローム」

「じゃあな」

こうして4人は帰っていった。

次の日の朝。波音はゆっくりと起き上がった。

「ん…あれ?頭痛い…」

…見事な風邪引きちゃんです。はい。

「…嫌な夢を見ましたね…」

汗をかいているのがそれのせいだと分かる。

―ソイツがいるからアイツが死んだんだよ―

―アンタさえ居なけりゃワタシは、ワタシは…！！―

―キミなんて居なくなればいい―

―死ねばいいよ、オマエ―

―どうしてあの人はいないのにアナタがいるの？―

「っ黙れ…だまれぇ！！」

大声を出したことに自分自身が驚く。

「っアイツらは…忘れてしまえばいい…」

なのに、どうして…

「何も思ってない…感情移入する必要も無い…」

なのに、なのに…

「なんで、涙が出るんだよ…！！」

『たとえ、誰かが傷ついていても…時間は止まらない』

当たり前の様で誰もが知ってそうで…知らない。

平等に動く針が…時に残酷なことを…。

そして、それが受け入れ難いことを…

12．え？何で此処に…？（後書き）

うふふ！もう壊れちゃえ★

13．久しぶりの学校（前書き）

キャラ崩壊とか色々ヤバイ。

アンケートの結果、雲雀落ちのリング戦ありです！

13．久しぶりの学校

サブタイトル通り学校に行きました。

朝、あんな事があったせいで不機嫌な波音。

久しぶりに学校に顔を出す。

「…目一杯楽しもう」

いじめを楽しみにしながら…？

～学校～

靴箱に靴が…ある。

「いや、普通だろ」と思った方、…正常です。

「あれ…靴が普通にある。靴箱も壊れてないし…？」

ぼくがいじめの対象になってないのか？

などと呟く。

少しネタバラシだがもう気づいてるだろう。

彼女は前世、いじめを受けていた。だからまぁ、

新しい上靴を持ってきてたりと用意周到だ。

…必要なかったけど。

廊下にも何も無く、そのまま教室についてしまった。

「…水、かな？」

バケツを持つ影が見える。

敬語が外れているのは不機嫌だからだ。

ガラッっとドアを開ける。が、

バケツが見えた瞬間閉める。

バシャァ！！

「うわぁ！！」

という悲鳴は波音のはずだったが

波音がドアを閉めたためにかけた方にかかった。

「ってめぇ！」

びしょぬれの男子生徒が波音に駆け寄る。

そして…

ビシャア！「！！」

ペットボトルの水をかける。

二重構造だったとはさすがに思わなかったので当然波音にかかる。

「…冷たいです。何してるんですか」

「お前、美加ちゃんに手ぇあげたんだってな！」

「女の子に暴力なんて最低」

じゃあ、波音は女の子じゃないのか。

というツッコミは普通にスルーされるだろう。

そういうもんだ。（作者体験談）

「汐海さん、もう一度だけチャンスをあげるよ。」

スレツナになってきたなぁ…

「美加ちゃんの仲ｍ「なりません。というより、仲間って多数対少数認めましたね」…」

「それにしても…」

波音の声が変に高い。キーじゃなくしゃべり方が。

「こんなもんですか。いじめって」

「「「

この中には隼人も入ってるらしい。

～応接室～

「失礼します」

「波音…ってどうしたの」

「いや、ちょっと水をかけられて」

「…咬み殺「止めて下さい。グルだってばれるじゃないですか」…（ムスッ」

「そんなあからさまにムスッとしないで下さいよ」

「…これ、制服」

「あぁ、ありがとうございます」

「着替え終わったら言ってよね」

そう言って恭弥は応接室から出た。

「…とっとと着替えましょう」

～5分後～

「もういいですよ」

「ん」

恭弥が入ってくる。

「では、ぼくは帰りましょうかね…？」

帰ろうとした波音の腕を恭弥がつかむ。

「書類整理。君、風紀委員でしょ」

「う…分かりました」

と、言うわけで波音は書類整理うを手伝う羽目になった。

「また、多いですね…」

「しょうがないでしょ」

「まぁ、そうですね」

何百枚という束を。

～2時間後～

「終わった…」

「帰ってもいいけど？」

「いえ、眠いので此処で寝ます。誰も入れないで下さいね」

「そう。分かったよ」

「あ、昼になったら起こしてください」

「はいはい」

「宜しくお願いします…スゥ」

「さてと、僕は続きをしようかな」

恭弥は今日の分が早く終わったので明日の分も少しやり始めた。

…応接室は静かな部屋になる。

～昼休み～

「波音。お昼だから」

少し揺すってみるのだが、起きる気配は無い。

サラリと恭弥が波音の髪を撫でる。

波音を見つめる恭弥の瞳はいつしか

…愛する者を見る瞳に変わっている。

勿論、恭弥も波音も分からないのだが。

自分の気持ちに気づくのは後、どれほど先なのだろうか…

「…おきないし…」

ベチンッ

「痛いっ！」

頬をたたく。…普通なら出ない音だと思う所を見ると相当の力だろう。

「なにするんですかっっ！」

少し涙目になりながら波音が訴える。

「おきないのが悪いんだよ」

「…すみませんでした」

勝てないと悟った波音は即座に負けを認めた。

「で、どうするの」

「あぁ、帰ります。ありがとうございました」

「…そう。じゃあね」

「はい。また明日」

二人は別れた。

明日に重大な報告をしなければならない…なんて

知らないまま…

13．久しぶりの学校（後書き）

リング戦…ねぇ。

あぁ…どうしようかねぇ…

アンケート投票してくれた皆様有難うございました！！

１４．ヴァリアー正式入隊（前書き）

ggggggggあははは

でも見てね。

１４．ヴァリアー正式入隊

色々あって帰ってきた波音に
夜、電話がかかって来た。
「…？はい」
携帯に出ると
「ヴォォォイ！」
馬鹿でかい声が聞こえる。
「…相変わらず煩いですね、スクアーロ」
「うるせぇ！お前のヴァリアー入隊が正式に決定したぞぉ」
「！！本当ですか」
「嘘言ってどうするんだぁ」
「…」
返事が無い電話にスクアーロが呼びかける。
「？オイ、どうしたぁ？」

「…」

波音の心情

「（ファミリーの敵になるのか…

どう説明しましょう…）」

「ヴォォォイ！」

「うわっ！？どうしたんです」

「話は終わりだぁ！切るぞ！」

「あ、はい。分かりました。ありがとうございます…あ」

言ったころには既に切れていた。

「……さて、と」

明日には…説明しないといけない。

自分の口から。

波音はネロファミリー全員にメールを送った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

To：獄寺　隼人

雲雀　恭弥
藤咲　凪
六道　骸

Ｓｂ：いきなりですみません
明日学校休んで朝８：３０分頃に
ぼくの家に来てくれませんか？
重要な話が有るんです。

ーーー

…と、言うことは、骸からはメールが来ないだろう。

次に恭弥。

ーーー

Ｓｂ：そうか

分かったぜ。波音のことだ、

すげぇ重要なんだろうしな

――――――――――――――――――――――――――――――

…一部分ある人と似てるな。

そんなに波音が重要という話の重要さが高いのだろうか。

いや、確かに今回は高いで済む話では無い。

「どう説明しましょう…」

悩んでる内にいつの間にか波音は眠っていた。

～朝８時～

「ん～眠い…よく寝た…けど」

低血圧な波音は少し寝ぼけている。

後３０分で来るのを知ってるので

着替えたり色々していた。

とか、なんやかんやしてる内に全員集まったり↑

「ではでは、重要な話を始めます」

「何なの、早くして」

「これから、ちょっと敵になります」

「「「「…え？」」」」

「いや、『え？』じゃ無くて」

「どんな何に対しての敵ですか」

「…言っちゃっていいのか分かりませんけど言います」

リング戦をサラーッと説明する。

「で、そのヴァリアー側につくんだな？」

「そういうことになります」

「…頑張って」

「へ？」

凪の答えに間抜けな声を出す。

「お前が決めた事なら俺達はとめねぇよ」

「強い奴と戦えるなら構わないよ」

「何か意味があって選んだんでしょう？なら別に」

「…私達は…波音の仲間…それだけでいい」

「！！っ…あ、りがとう、ございます」

「感謝される事誰も言ってないんだけど」

「いいんですよ。ぼくが言いたいだけです」

波音は軽く笑ってから

「話はこれだけです。ぼくは少し準備があるので…」

皆と別れてからボソリと呟いた。

「本と…ありがとう」

波音は準備に取り掛かった。

イタリアへ行くための。

１４．ヴァリアー正式入隊（後書き）

さてと、白川をどうするか

未だに考えてないんだよね～

happybirthday僕！

今日（と言っても後３０分）は僕の誕生日！

明日でいいから誰か

おめでとうと言って下さい！

誕生日メールはリア友１人しか

貰って無いんです。

いや、明日になれば学校で友達がくれますけど

と言うわけで誰か祝って？

「ぼくの作者さん、おめでとうございます」

！！波音ちゃん♪ありがとう！

駄が付いてないところが偉いね♪

「ファミリーの皆は来れなかったので代表がと言うことに」

嬉しいよー！（泣

PC禁止令出たから更新出来なくなるのにー

「Σそうなんですか」

うん。部活サボってたのがバレたのー

「…ご愁傷様です」

いえいえ。自業自得なんで

と言うことで誰か祝って？

ｈａｐｐｙｂｉｒｔｈｄａｙ僕！（後書き）

…お願いします。

いや、マジで。

15．いや、それは…ねえ？（前書き）

久しぶりの更新！

今尚ＰＣは使えないので

携帯からの投稿です！

15．いや、それは…ねえ？

という事があった次の日のお話。

波音は応接室で恭弥にこんな物を提出していた。

「…何これ」

「停学届けです。もしかして知りませんでした？」

「…君、僕をバカにしてるの？」

「いいえ？そんなつもりは」

「咬み殺すよ？」

「やめて下さい、冗談ですよ…イタリアに行くんです」

「へぇ、そう。行ってらっしゃい」

「素っ気ない…行ってきます」

「あ、そうだ」

「？」

恭弥は何かを思いだすかのように

机から何かを探しだした。

「これ、あげるよ」

ポイと放り投げられた物を見事キャッチする。

「っとと…これは…コート？」

その手に有るものとは

フード付きで、波音が着ると…

口元しか見えないだろう長めのコートだ。

「そう。姿、ばれないようにね」

「本番（たたかい）の時の為、ですか？」

「…、まぁね」

少し笑うと波音は窓の外を見た。

「次の日本はいつになるんでしょうか」

「知らないよ、そんな事」

「酷いですね…恭弥」

「別に？」

…あまり時間がある訳ではない。

つまり、そろそろ行かないと…

飛行機が行ってしまう。

「そろそろですね。では、また会うときまで」

「じゃあね」

…波音は応接室から出て行った。

出て行ったドアを見ながら恭弥は呟く

「…並中の規則破らないでね」

『並盛中学校規則第三十二条

停学する場合、理由が終わり次第停学を止め、登校する事。』

さて、恭弥と波音ともう1人の話。

それは、ちょうど波音がイタリアに着いた頃。

その人物は見事な嘘をついていた。

「十代目!野球バカ!白川さん!

…今までスンマセンでした！」

…分かっただろうが一応言っておこう。

人物とは隼人だ。

「「「「「「！！！？？！？」」」」」」

クラス全員がこの言葉に驚くのも無理はない。

なんせ、あの隼人だ。

いじめていたはずの。

「俺、汐海に脅されてたんです。

『ぼくの要求を呑まないと…そうだな、十代目の命は無いよ』って…」

「…そんな事があったんだ。ごめんね？獄寺君」

「！信じてくれるんすか？」

「信じるに決まってるのな♪」

「っ…。白川、その…わ、悪かったな」

「大丈夫だし別にいいんだよぉ獄寺君！それより何で言ってくれたの？」

「確かに。汐海さんにバレたら…」

「それは大丈夫です。あいつ転校するから」

「転校するんだぁ、汐海さん。」

「…十代目」

「俺たちの事を思って…こっちこそごめんね？」

「なのなー♪」

「テメェには言ってねぇ野球バカ！」

いつもの…あの時の様。

「仲良いねぇ？」

「仲良くなんか無い！」

「酷いのなー」

隼人は心中で言う。

（十代目、許して下さい、

嘘を今なおついてる事）

さて、これからヴァリアーとの戦いが

始まろうとしているのだが

その前に少し。

波音のヴァリアー生活を少しだけ

覗いて見ましょう。

15．いや、それは…ねえ？（後書き）

見てくれている皆さん方
（少なくとも1人はいるはずだ。）

ほんとスンマセンでした！

携帯だとＰＣより書く気が無くなるんですねー

と、言い訳をしてみたり↑

携帯でも頑張らないとなー

１６．番外編っ！（前書き）

今日ならではと言うことで。

16．番外編っ！

「ベル、そっち終わりました？」

「おう！ばっちりだし♪」

「マーモンの方は…大丈夫そうですね」

「金、貰うからね」

「え…」

「ムム、冗談だよ。ツケにしてあげる」

「ありがとうございます」

「波音ちゃ～ん、手伝ってくれないかしら？」

「今行きます」

この日ヴァリアーは慌ただしく準備をしていた

ある人を除いて。

「波音ーこれどこに飾んの？」

「それはテーブルの上くらいに」

「オッケ♪」

「スクアーロはどこだい？」

「飾りを買って来て貰ってます。そろそろ…」

「ヴォォォイ！」

「ザンザスにばれますよ＾＾；」

「Σすまねぇ」

「いえ、それより買って来てくれました？」

「あぁ。ほらよ」

「ん、ありがとうございます。ベル、これそっちに飾って下さい」

「んー♪」

「波音ちゃ～んケーキなんだけど」

「キルシュワッサー買って来たのでそれを染み込ませて下さい」

「分かったわぁ」

「皆さん各自プレゼントは用意しましたね？」

「当然！だってオレ王子だもん」

「僕も用意してるよ」

「私も大丈夫よぉ」

「俺も買って来たぞぉ！」

「よし、ぼくも大丈夫ですし…準備は完璧です！」

「「「「誕生日おめでとう！」」」」

「…」

そう、１０月１０日は我らがヴァリアーボス、

ザンザスの誕生日なのだ。

いつも以上のご馳走や飾り付け

一人一人のプレゼントは…企業秘密にしておいて

それはそれは盛り上がったらしい。

…未成年とか関係無く全員飲んで次の日は皆

…二日酔いだったらしい。

皆が酔いつぶれて眠った頃

ザンザスと波音は2人、これからの話をしていた。

「ザンザス、戦いの時の話なんですけど」

「…白川は好きにしていい、殺しても構わない」

「!!…（ニヤッ

…その言葉、待っていた」

「暇つぶしぐらいにはなる相手だろう」

「なら、いいんですけど」

「せいぜい楽しみにしておけ」

「そうします。あ、そうそう。ザンザス誕生日、おめでとうございます」

「…（フッ」

波音が部屋に帰った後

「…（アイツは何を隠している…？）」

ザンザスが思っていた事が分かるのは、そう遅くもない…。

16．番外編っ！（後書き）

途中の波音の台詞、一つだけ
ＫＨのあるキャラの台詞なんです。
分かった方は感想に
書いて下さい！

答えはいつか書きます♪
後…ツナとリボーンの誕生日
番外編書く気が無いんですけど（敵なんで）
書いた方が良いですか？

…書こうと思えば…頑張るので
アンケートとまでは言いませんが
ご希望があれば宜しくです♪

17．波音、王子のティアラ知らね？（前書き）

遅れてすみません。

お知らせをあとがきに書かせて頂きますので

そちらも読んで下さい。

敬語、ローテンションなのは機嫌が悪いだけなので

ほっといて下さい

17．波音、王子のティアラ知らね？

なんとなくで飛ばします

波音が来て一週間経ったある日のこと。

「ん…あれ、メール来てる」

ベルの携帯に一件のメールが来た。

相手は波音。そして波音には任務がない。

これは波音が拒否したからだ。

つまり波音は…

城の中に居てるはずだ。

「メール使わなくても良くね？」

内容を見る。すると

「Σ（ ゜∇ ゜）」

ベルが固まった。

『僕を見つけて下さい。つか、助けて下さい。ヒントはマーモンに』

「…マーモン…姫に何してんだよ…」

「ムム、ちょっと遊んでみただけだよ」

「Σ（ﾟ∇ﾟ）」

「さっきから驚きすぎだよ…」

「いやいやいや、なんでここにいんの？姫に何したんだよ」

ベルの波音の呼び方が姫なのは

…まぁ、想像にお任せする。

「書いてる通りヒントを言いに来たんだよ」

「…」

「まず、僕は普通に部屋にいたんだよ」

～～回想～～

「マーモン！！助けて下さいぃ！」

「ム、どうしたんだい。君がそんなに慌てるなんて」

「匿って下さい！」

「…？」

その時、ドアがノックされた。

「マーモンちゃん、波音ちゃんを見てないかしら」

「いないって事でお願いします」

「…ムム、見てないよ」

「見つけたら教えてねぇ～ん」

足跡が遠ざかっていった。

「…た、助かった…ですね…」

「どうしたんだい？」

「いや、ルッスが『ゴスロリ服作ったから着て』って…」

「ムム、それは災難だったね」

「本当ですよ…（ハァ」

「…波音、ちょっと手伝ってよ」

「嫌な予感しかしないので嫌です★」

「じゃあSランクの報酬2倍「やらせていただきます」」

「じゃあこれ飲んで」

「？はい」

ゴクン

「なんともな…！？」

「ムム、成功だね」

波音はサラサラと消えていく

「城の中のどこかに飛ばされるだけだよ」

「いや、「因みに誰かに見つけてもらうまで透明だから」えぇぇ…」

「ベルにメールでもしたら？」

「…そうします」

～～回想終了～～

「うわ、波音かわいそー」

「で、波音探しに君が抜擢されたんだよ」

「大体の場所は分かんねえの？」

「廊下や外じゃ無いのは確かだよ」

「ふ～ん♪」

「声は聞こえる筈だよ」

「おっけ。ししっ♪暇つぶしにはもってこいだし♪」

「じゃあ僕は部屋に戻るから」

こうしてベルの波音探しは始まったのでした。

で、波音視点に。

「どうしましょうか…」

波音がいたのは屋上。

「鍵掛かってますよ…って事はベル来ませんよ…」

まさかの屋上にいた波音はよく考えてみると

「あ！そうでした！」

ゴソゴソ

「携帯ありますもん電話しましょう」

というかくれんぼなら反則になる事をした。

『もしもし？』

「ベル、いまどこです？」

『電話していいの？』

「駄目とは言われてません」

『まぁな。何処にいんの？』

「屋上です」

『げ。鍵かかってるじゃん』

「だから動けないんですよ」

『んじゃそっち行くし♪』

「お願いします」

というやりとりの後、波音が見つけたのは…

「屋上は誰も居ねぇ…つまり俺らは見つかってない！」

…どこかのマフィアの生き残りかなにか。

「いや、居ますよ～屋上居てますよ～」

透明ですけど。と付け加え

前に貰ったベルのナイフを取り出す。

「銃は勿体無いんで♪」

シュッ

「「ぐぁぁ！」」

「馬鹿ですね、僕にやられただけましだと思って下さい」

少し間を開けて

「他の幹部ならもっと酷いですよ、多分」

「ししっ♪ひーめ」

「！！ベル、来たんですね」

「そりゃあ♪で、えーとこっち？」

ベルがドアから右斜め前を指す。

「はい、そうですよ」

「んーこの辺！」

ベルが何も無いところに抱きついた瞬間

パッと波音が姿を現した。

「ふぅ。ありがとうございました」

「ししっ♪大丈夫だし♪」

「そうですか？じゃあどいてください」

「嫌♪」

「はぁ…どいてください」

「ヤだし。だってオレ王子だもん♪」

「それはあまり関係ないです」

「知らねーし」

「…はぁ」

こんな感じでストーリーが終わる。

さぁ、次はいよいよ戦いが……

始まる

17．波音、王子のティアラ知らね？（後書き）

お知らせは3つあります。

？火、水に中間テストがあるので、
更新遅れてしまいました。すみません。

？PCが本格的に壊れたので、PC禁止令が終わっても
出来ない可能性が高いです。
つまり、更新ペースが…

？ヴァリアーとボンゴレの戦いで
白川を壊します。が、
嫌な方は言って下さい。

諸事情で更新が遅れた事、
本当に申し訳ありませんでした。

これからも見て下さると嬉しいです。

18．知りませんよ、マーモンに粘写して貰ったらどうです？（前書き）

久しぶりです♪

これから題名は皆の会話形式に

していきます。

後書きの方も宜しくです♪

18．知りませんよ、マーモンに粘写して貰ったらどうです？

朝、普通なら6時に起きる所を
何故か5時に起きてしまった波音は
キッチンに向かった。
…久しぶりにルッスの手伝いをするつもりなのだ。
「ルッス、手伝いに来ました」
「まぁ！じゃあこれ持って行ってから皆を起こしてくれるかしら？」
「わかりました」
と、云うことで波音は各自の部屋に回った。
～ボス～
「ボス。ご飯持ってきたのですが…」
「…置いとけ」
「分かりました」
「…オイ」

「？なんですか」

「俺らとオマエは利害が合ったから手を組んだだけだ」

「分かってますよ。つまり…」

「「仲間ではない」」

「…では、僕は皆さんを起こしてきます」

「…あぁ」

～ベル～

「ベル～朝ですよ、起きてください」

「ししっ♪もう起きてるし」

「それは失礼でしたね、では食堂に来てくださいね」

「おっけ。ししっ♪」

～マーモン～

「マーモン起きて「るよ」あ。そうでしたか」

「食堂に来て下さいね」

「ムム、分かったよ」

～スクアーロ～

「スクアーロ、起きてくだ…っていない；」

と、言うわけで波音が帰って来たころには

皆もう集まっていた。

「「「「頂きます」」」」

さて、ヴァリアーは今日ついに

…並盛に向かう。

波音の服装は…恭弥に貰ったフード付きのコート。

「あり、波音いつもと違う？」

「あぁ、フード被ってますからね」

「ムム、そろそろ行くよ」

「あ、忘れてた。皆さんにひとつ」

「なぁにぃ？」

「僕の事は『波音』じゃなくて『シオン』でお願いします」

「おっけぃ！ししっ♪」

「ム、分かったよ」

「では行きましょうか…いえ。…皆、行くぞ」

「「「「！！！」」」」

波音の敬語が外れた事に驚くヴァリアー。

「俺ってバレたらいけないからな」

「敬語外すとか意外♪」

「いいだろ？別に」

「…俺、寝るから着いたら起こして」

「いいぜ、シオン♪」

「さんきゅ」

波音…もといシオンは飛行機で寝た。

シオンには気がかりな事があった。

隼人は無事にボンゴレに戻ったらしい。

の、だが

原作だと隼人は負けてしまう。

それはつまり、ボンゴレがまた何かするかもしれない。

シオンはそれを十分に分かっているのだが

ベルが負けてもそれはそれで難しいのだ。

つまり、シオンは原作の様に引き分けに

それでいて隼人を勝たせなければいけないのだ。

「いっそ…」

シオンは誰にも聞こえない様に

「月と星が2つ分なら…！！」

そうか、それがいい。

シオンは眠ってアイツの所に行った。

「久しぶり。ディオ」

「おお！久しぶりだな！誕生日以来か？」

「誕生日も実質的には会ってない」

「…ひでぇなぁ」

「…悪い。でも時間が無いんだ」

「いや、あるで！」

「「！？」」

「摘花さんじょー！！」

「どうして時間があるんだよ」

「だって今回の頼み事はもうＯＫやからな」

「…？波音、何の話だ」

「此処に来た理由がもう終わってるのか…」

「初めっから月と星は２つ分やねん」

「…あぁ。状況が読めた。お前が勝てば引き分けになるから丁度だ」

「そうか、じゃあ戻るな」

「せっかくやし、ちょっと居れば良いのに…」

「いや、色々あるし帰るよ」

「そうか。また来いよ」

「待ってるでぇ！」

「またな」

さてさて。

これから始まるヴァリアーとボンゴレ2つの戦いは

もうあと少しで始まってしまう。

シオンは白川をどうするのか…

18．知りませんよ、マーモンに粘写して貰ったらどうです？（後書き）

波音は白川を殺すのか
はたまた生かすのか…
運命はもう決まってる。

ＰＣは完璧壊れますた。
携帯もたまにしか使えません
けど、更新は頑張ります。

２作目を作ろうか考えてます
やるとしたらＫＨ。
やって欲しいか
出来たら感想を！

19．金取られんのぜってーやだし。（前書き）

遅れてすみません！
理由と言う名の言い訳をあとがきでしたいと思います。

後、携帯で書いてるので、
ふりがながちゃんと出来てないかもです。
適当に補足して読んで貰えると嬉しいです。
出来てない所は感想で言って下さい。

19．金取られんのぜってーやだし。

「…ん…ちゃん……シオンちゃん！」

「！！？…なんだ、ルッスか…」

「んもぅ、着いたわよっ！」

「ん、サンキュ」

ディオや摘花と話している間に

並盛に着いたらしい。

「久しぶり…って訳でも無いしなー…」

ダルそうに言うシオンに

「行くぞ、カス」

と言ったのは、もちろんザンザス。

寝てる間にレヴィが先に行ったらしい。

「星もそこに居っかな…♪」

「ム、なんでそんなに嬉しそうなんだい？」

「さっさとアイツと戦いたいから」

ー見雲雀と同じようだが少し違う。
戦い好き（バトルジャンキー）ではなくただの殺人衝動だ。

少し飛びます。

「待てェレヴィ！」

「一人で狩っちゃだめよ」

「他のリング保持者もそこにいるみたいなんだ」

「う〝お〝ぉい「…スクアーロ。でけぇ声出すなよ」ぐ…」

「…？女の人？」

黒いフードで顔は見えないが声からして女だろう。

ツナは首をかしげる。

突如、女が話し出す。

「沢田綱吉…今のお前は相応しくない。この時点で勝つのは此方だ」

「のけ」

リボーンが言った。

「でたな…まさかまた奴を見る日が来るとはな」

「ＸＡＮＸＵＳ」

「ひっ」

ザンザスの殺気でしりもちをつく。

残りも動けない。

「沢田綱吉…」

コオオオ

「！！」

「まさかボスいきなりアレを……！！」

「オレ達まで殺す気か！？」

「ザンザス。ちょっと待った」

「「「「「！！！」」」」」

フードの女が待ったを掛ける。

「其処にいるのは…誰…いや、沢田家光。出ろ」

「「「「「「!?」」」」」」

またも全員が驚く中、沢田家光は現れた。

「まさか見つかるとはな」

バジル達と共に。

「ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

〜〜説明中〜〜

「同じ種類のリングを持つ者同士の1対1のガチンコ勝負だ」

「…なぁ、沢田綱吉。お前の所には『星』がいるよな。それ、どうするんだ」

「星って…美加ちゃん!?」

知ってるのか。とは、

あえて言わなかった。

ふと獄寺の方を向くと、波音とわかってるようだ。

目が合った瞬間軽く笑った。

沢田家光がシオンに話し掛ける

「お前の名前と属性は？」

「…名はシオン、属性は…ボス、言っていいのか？」

「構わねぇ」

「属性は月だ」

「月…？」

「星と同じ稀な属性」

「美加ちゃんはこの人と戦うの！？」

「だろうな。だが…」

リボーンは言葉を紡がなかった。

「「お待たせしました」」

「今回のリング争奪戦では」「我々が審判（ジャッジ）をつとめます」

～～チェルベッロの説明後～～

「尚、初代から存在しないという星と月が揃ってる事態について、ですが」

「「！！！」」

門外顧問チームが驚きを隠せずにいる。

「運良く月と星が別のチームに居ると云うことで二人に戦って貰います」

「じ…じゃあ美加ちゃん戦うの!?」

「星って…白川なんスか?」

「あ、獄寺君に言ってなかった?そうだよ、美加ちゃんは…」

最強の星の守護者なんだ。と、ツナが言葉を紡ぐ。

「…おい、チェルベッロ、俺はソイツと戦うのか?」

「ハイ、ある事情がありますので」

「…事情?なんだ、ソレ」

「ルール説明の時に申します」

「では。場所は深夜の並盛中学校。詳しくは追って説明いたします」

「え!?」

「並中でやんの!!?」

「それでは明晩11時、並盛中でお待ちしています」

「さようなら」

チェルベッロは去ってしまった。

沢田が何か騒いでる気がするが、シオンは気にしなかった。

「…そっちのボス、沢田」

「うぇ!?」

「超直感…か…情けないな」

「んなっ!!」

「テメェ!!果たす!」

隼人がダイナマイトを投げる。

…といっても、

「!…（ニヤッ」

「あぁ!!」

よけられる事が前提で投げられている。

「ヴァリアー、先、帰っといてくれ」

「!分かったよ」

「早く帰って来いよ、姫」

「分かってるさ。後、姫って呼ぶな」

「ししっ♪」

ヴァリアーが行ったのを見送ってからシオンは喋り出す。

「そっちの星の守護者の名前は？」

「…白川美加ちゃんだよ」

「仲がいいのなら覚悟しておけ。…重傷どころじゃなくなるかもな」

「「！！！」」

シオンは最後に呟いてから戻った。

「…偽物の星は…空など照らせない」

19．金取られんのぜってーやだし。（後書き）

僕の友達は知ってるでしょう。
サイト事態には来てたことを。
ただ、小説を作ってる時間がなくて…

これからも頑張ります。

感想の一つでやる気も変わるので
くれると嬉しいです。

20．あぁ…手伝います。（前書き）

いつもよりは長いかもです。

恋愛注意報発生。

本格的に雲雀にしていきます

20．あぁ…手伝います。

全てはシオンの一言から始まった。

「俺、今日行かないから」

「「「「…え？」」」」

スクアーロは箸を落とし、ルッスは作っていた手を止める。

ベルは思わずティアラを落としそうになり、マーモンは勘定していた金をばらまいた。

ヴァリアーがこんなにも驚くのには訳がある。

それは昨日の夜のこと…。

「ただいま。みんな」

「姫おっせー。待ちくたびれたし」

「悪い」

「ムム、シオン？どうかしたのかい？」

姫呼びに反応しなかったシオンをマーモンが疑問に思う。

「…別に、何も無い」

またしても素っ気ない。

「姫？大丈夫かー？」

「大丈夫」

「…波音？」

ベルとマーモンが流石におかしいと

本名で呼んだり、頬を抓ったりしても

シオンはぼーっとしていた。

ルッスやスクアーロも集まってきた。

そして、ふいに言葉を漏らした。

「白川美加…絶対殺す」

「シオン…？」

聞こえて居ないのか、聞き取るのが精一杯な早口で喋り出す。

「あれ、壊してやる。隼人は無事に行けたみたいだけどクロームはまだだし、沢田綱吉の超直感消えてるのあれのせいだし、山本はそれに乗っかってるし…ヴァリアーもちゃんとは分からないけど、傷ついたのは確かだし。何しろ…俺に無いものを持ってる。その癖に、いや、そのせいでか？狂ってやがる。つか、何で別行動してんだよ。

隼人には悪いけどあんま離れて欲しく無いんだけど。あれに会ったら気絶する位の殺気は送ろうと思ってたのにいなかったし。うん、やっぱりあれは早急に壊すべきものだよ。でも今殺ったら後の楽しみが無くなるしな…。それに戦いのフィールドとかみてぇし。あれの息絶える場所が何処になるかな…♪でもこれ以上被害出したくないですし…彼らが戻れなくなる前に壊すべきですよね…？あぁやっぱりあれ壊さないとな…」

「ちょい！シオンストップ！怖いから！」

「え、あれ？ベルにマーモン、それに皆さんも。どうしたんですか？」

波音の口調でふと正気に戻るシオンを見てホッとする。

「呪文のようだったわよ～シオンちゃんの独り言」

「…聞いてたのか」

「「「「勿論」」」」

「…月・星戦は最後の方になると思う」

「へ？あぁ、リング争奪戦な」

「そう。全員見届けたいしな」

「ムム、君が負けるはず無いだろう？」

「一億分の1も無い。でも、嫌な予感はする」

「姫のそういうの当たるからな…」

「確かにね」

「…俺、もう寝るわ。おやすみ」

「おやすみ、姫」

とまぁ、昨日こんな事が有ったにも関わらず

今シオンは『行かない』

と、言ったのだ。

「誰かわかんないのに?」

「俺じゃないのは確かだし?結果は教えて欲しいあぁ、後さ、」

「ム、まだあるのかい?」

「うん。ザンザスに言っといて。『仲間を討つな』って」

静寂が部屋を包む。

その空気に耐えられなくなったシオンが

「じゃあ、行くところ有るから。またな」

と言って出掛けたがヴァリアーは追いかけず、ただ其処を見つめていた。

『またな』と言う言葉を耳に残して。

シオンは本当の仲間に収集をかけた。

色々な話し合いが必要と考えたのだ。

暫くしてシオン…いや、波音の家には波音を入れた5人が集まった。

「皆、久しぶりですね。隼人以外」

「…会いたかった…波音」

「ありがとう、凪」

「クフフ、お待ちしてましたよ」

「待っててくれたんですか」

「昨日会ったけど、久しぶりだな」

「ええ、昨日は別人として、ですからね」

「波音、お帰り」

「…ただいま、恭弥」

皆との再開を果たした所で、波音が本題を切り出す。

「とりあえず、ぼくは勝ちます。ヴァリアーとして」

これは絶対事項だ。

「あなた方の勝つ自信が聞きたい。霧はどっちが出るのかも」

「俺は…敵がどんなに強かろうと勝つ。今負けたらまた逆戻りだしな」

隼人は苦笑いをしながらも勝つと言った。

「僕は、負けるなんて思って無い」

恭弥は当然だ。

「…私たちは…」

「契約はしているままなので、とりあえずはクロームに」

「…骸、ちゃんと凪が負けそうになったら助けろよ?」

「勿論です。と言うか敬語外れたんですね」

「いえ?このコート被ってるので。それに戦いのフィールドで敬語

だとばれますからね」

さて、波音が考えてるのは1つ。

大空戦まで持って行く方法だ。

隼人は原作で負けていたがそれは絶対無くなる。

…ベルに頼むか、見えないように力を貸すつもりだから。

なら、ボンゴレは晴、嵐、雨、霧、雲…計五つ。比べてヴァリアーは…

雷、星・月、大空、…四つ。

これじゃ大空戦に行かずに負けてしまう。

「……」

「ちょっと、波音?」

「……」

「波音…どうしたの…?」

「波音、返事して下さい」

「……」

「おい、波音」

「……んあぁぁぁ！」

「「「「ビクッ」」」」

「…もう。いいです。どうにでもなってしまえ…」

「波音、怖いからやめてくれる？意味分かんないし」

「うぅぅ…」

「…（イラッ」

グイッ

「…！？」

「「「「！？！！？」」」」

何があったかはご想像に…嘘です。

キスされました。

誰に？…恭弥に。…誰が？…波音が。

「落ち着いた？」

「……（放心中」

「。ハァ。今日は解散ね」

恭弥はとっとと出て行ってしまった。

皆も放心しながら、あるいは赤くなりながら

部屋を出て行った。

残った波音はと言うと、

「～～～！／／／／」

真っ赤になっていた。

そして波音も家から出て、ぶらぶらと並盛を歩いてから

ヴァリアーの元に戻った。

そして待っていたのは…

ルッスが負けて重症と言う現実だった。

20．あぁ…手伝います。（後書き）

大胆♪

父の魔の手から逃れながら書くのも

めんどくさいながら頑張ります。

感想待ってます。

あ、でも見てくれるだけで充分

書く気にはなりますので。

21．ヴォォイ！何してる！（前書き）

今回も少し長ければ嬉しいな。

21．ヴォォイ！何してる！

『ルッスが重症』

ベルの声で聞こえたその言葉

別にシオンにとってびっくりする程ではない。

ヴァリアーの皆が静まり返っている。

理由は2つ。

またね。と言う言葉を破ったから。そして…

討ったのは…モスカ。

以前、シオンがキレたとき、何があったか

ヴァリアーはシオンが怒ることを極端に避けている。

でも、シオンの返答は予想外だった。

「あぁ、やっぱり？じゃあ直してくるわ。俺」

「え…シオン？」

ぽかんとした全員をほったらかしにルッスの元に向かう。

「何、アレ。え、姫なんであんな冷静なの？」

「…ついに頭がいかれたんじゃない？それにしても…」

「おかしいぞぉ。まるで…」

「「「初めから知ってたみたいに…」」」

バン！

「改めてただいまー」

「ありがとうねぇ。シオンちゃん」

「「「！！！」」」

「ひ…姫、何したの？」

「姫って呼ぶな。ただ治しただけだけど？」

「ムム、どうやってだい？」

「適当にパパッと」

「「「…」」」

「何だよ、その疑いの眼差し。何なら本人に聞いてみ？」

「本当にパパッとなのよ？」

「どんな技使ったんだぁ？」

「…俺の能力的なナニカで」

読者の皆様、忘れていただろう。

シオンは異常と過負荷を使えるのだ。

つまり『大嘘憑き』を使ったわけだ。

「ナニカって何だよ」

「さぁ？それよりさ、やっぱモスカ？」

「「「「っ！！」」」」

「…ま、しゃあねぇな。俺は今考え中なんだよな」

「ムム、何を考えてるんだい？」

「最重要機密情報なんで教えない。特にお前らにはな」

「え、いーじゃん別に」

「よくないの。つか無理だし」

「ケチだね、シオン」

「マーモンには言われたく無い言葉だな、それ」

「言われてるけどなぁ」

「るせぇ、スクアーロ」

ぐだぐだと言ってる間に何とか話を逸らしたシオンは

「じゃあ、俺寝るわ。おやすみー」

と逃げていった。

そして十分後

「あ、結局何だったんだ？」

「「「あ…」」」

その事にヴァリアーが気づいたがシオンの姿はもう無かった。

じゃあシオンは？

「はぁーー」

盛大な溜め息と共に寝っ転がっていた。

「晴れはあっちでー雷はこっちでー嵐はあっちでー」

換算中らしい。

「雨もあっちでー。霧と雲がこっちのはずないなーー」

「あ、月星と大空はこっちか…」

溜め息混じりに呟いた言葉は誰にも聞かれず…

「今のはどういう事だ」

訂正。

「一番バレちゃいけない人にバレたぁぁ！」

「るせぇ、カス。話せ」

「無理です！」

「拒否権なんざねぇ」

「あります！どこぞの風紀委員長と同じ事言わないで下さい！」

「カッ消すぞ」

「それでも言えません」

「話せ」

「嫌です。…どうして勝てないと知ってるのに戦う？」

「！！！なぜ知ってる」

「秘密。知ってますよ。全部。知らないとでも？」

「知った口を聞くな。挑発してんのか」

「してますよ？もちろん」

部屋が殺気で蔓延する中、２人はただ黙って相手を見据えていた。

シオンはただ『バレた』焦りと『ある言葉』への怒り。

ザンザスは『あの事』への怒り。

先に口を開いたのはシオンだった。

「知った口を聞くな…ですか。何故？僕は知ってますよ。ほぼ全て」

「俺の前でその話をするな」

「嫌です。…僕だって多少の怒りはあるんですよ」

「黙れ」

「何故？…貴方は知らないから言えるんです」

「何の話だ」

「９代目は少なくとも貴方を…「るせぇ！」っ…」

「それ以上言ったら殺すぞ」

「…分かりました。でも、やっぱり」

シオンは一息おいて

「貴方は嫌いだ。僕」

そう、呟いた。

ザンザスは聞こえたのか部屋から出て行った。

「どうして、愛されて育ってあんな事言えるんでしょうか」

シオンは言ってから眠りについた。

次の日、シオンは食堂に、いやヴァリアーの皆の前に、現れなかった。

能力の方とザンザスとの話、２つのおかげで、躊躇したのだろう。

テーブルには

「リング戦には出る」

とかかれた真っ青の紙が置かれていた。

ヴァリアーは何も言わなかったが、心の中では皆、何かを考えていた。

「ふぅ」

走っていたその人は一息ついて

目の前の山に向かって躊躇もせず、もう一度走り出した。

向かっている方からは金属音が聞こえる。

そして2つの人影。

遠目から戦っているのが分かる。

そして2つの人影に向かって走っていたその人はストップをかけた。

「そこの金髪鳶色目と黒髪学ラン少年、一旦ストップ」

人影は戦う手を止め声の方を向いた。

「何、その呼び止め方は」

ムスッとした顔で、黒髪学ラン少年…もとい雲雀恭弥は殺気を呼び止めた相手に向かって放つ。

「…誰だ?」

一方金髪鳶色目と呼ばれたのは跳ね馬ディーノ。初対面らしい。

そして2人を呼び止めた相手…シオンは話しかける。

「はじめまして。ぼくは汐海波音と言います。貴方に話がありまして」

「ちょっと、僕の方は無視なんだ？」

恭弥が不服そうなのに、波音は笑って

「拗ねないで下さいよ」

といった。

「拗ねてなんか無いよ」

「その顔で言います？」

「うるさい」

「な、なぁお前らの関係って…？」

「「…仲間？」」

「んなぁっ！」

ディーノが叫ぶ。

「「どうしてそんなに驚くんです？／の」」

「だって…お前が仲間とか」

恭弥を指差して答えるディーノに波音は納得し

「ああ。…別に恭弥は仲間思いのいい人ですよ」

「まじかよ…」

「マジです」

即答の波音にひとつ溜め息をつくディーノ。

「このじゃじゃ馬がなぁ…俺にも懐いてくれると嬉しいんだが」

「誰がキミに懐くって？」

殺気立った恭弥を波音が抑えてから本題をしたいと申し出た。

「出来ればロマーリオさんも。そこにいらっしゃるでしょう？」

スッとある木に指を指す。そして其処から人影がひとつ。

「オレにも気付いてたのか」

頭をかいて笑うロマーリオ。

「えぇ。…あ、恭弥は駄目ですよ」

恭弥が更にムッとした顔になる。

「どうして？」

「リング戦に出る守護者だからです」

…理由はもうひとつあるのだが。

「…ハァ。また戦ってあげますから」

「！！本当かい？なら、仕方ないね」

恭弥は後ろを向いて行ってしまった。

そして本題が始まる。

「今からぼくの言うことは全て本当です。嘘偽りなく話すので、話の腰を折ったりせずに聞いて下さい」

2人が頷くのを確認してから話し出す。

「まず、ぼくはヴァリアーの月の守護者、シオンです。そしてぼくには誰にも言えない秘密があります」

「「！！！」」

門外顧問の人から聞いているだろうシオンと自分が同一人物だと知らせるだけで2人は驚く。

「…こんなもので驚いてちゃあ身が保たないですよ」

「…続けてくれ」

ロマーリオの言葉を聞きまた話し出す。

「その秘密は言えませんが…とりあえずリング戦を大空戦、つまり大詰めまで持って行かないといけない。」

「此処で2人に質問です。星の守護者をどう思っていますか?」

星の守護者…つまり白川美加の事だ。

「言いづらいけど…多分嘘だろうな」

答えたのはディーノだった。

「星なんて属性聞いたことも無い。いや、月もなんだが」

「それは、ぼくも信じて貰えてない?」

「半信半疑ってとこだな」

「…そうですか。では…いじめの事は?」

「「…」」

様子からして知っているのだろう。

「白川美加は敵ファミリーだと思われます」

「「!!?」」

キャバッローネもそこまでは調べていないらしい。

「あの様子だとボンゴレを潰すつもりなんだと思います」

憶測でも何でもない。…神から直々に聞いたのだから。

「ぼくはアイツを壊すためたけに…と言っても過言では無いでしょう。此処に来ました」

2人の真剣な眼差しが少し痛く感じられる。が、そのまま波音は話を続けた。

「さて、初めにやっと戻りましたね。此処でお願いです」

初め…すなわち、大詰めまで持って行かないといけない話。

「大空戦まで行かないと、アイツを叩きのめせないんです。協力してはくれませんか？」

波音はこの為にわざわざこんな山奥まできたのだ。

「…本当に白川美加が敵ファミリーな事が分かれば手助けしたい。1日待ってくれないか？」

ディーノからはこんな返答が来た。…予想以上だ。

「2日は待てますよ。でも勝敗がどんどん決まってしまうので出来ればお早めに」

「分かってる。…そろそろリング戦が始まるな。俺らは調べるがお前は行った方が…」

辺りは黒色に染まりかけていた。

「あ、本当ですね。今日は顔出さないと。じゃあ…宜しくお願いです」

「あぁ」

3人の長い話は終わり、波音は並中に向かった。

シオンが着いた頃にはもう始まっていて、十年後ランボがいた。

「悪い、遅れた」

ヴァリアーの方に行くと、予想とは反して

「ししっ。姫おっせー」

「ムム、どこに行ってたんだい」

などと普通の会話が聞こえたので、シオンも何時もの調子で答えた。

話に寄ると、殆ど原作通りなものの、ある所が変わっていた。

ルッスの傷が完治していた事について、だ。

向こうは心底驚いていたらしい。

ヴァリアークオリティかと聞かれたらしいが違うと答えたそうだ。

後、もうひとつ。

リボーンについてだ。

これまでいじめの時も出て来なかったが、もしかしたら知ってるのかも知れない。

シオンと目が合った時に申し訳無さそうに目を逸らした。

とか、なんとか考えている内に決着が着いたらしい。

結果は原作通り此方の勝ち。

そろそろ本格的に調整しないと…などと考えていると、眠くなってきたので、

ベルにもたれてシオンは寝てしまった。

チェルベッロが次は嵐の…とか言ってるのを聞きながら。

21．ヴォォイ！何してる！（後書き）

…シリアス全開★
ギャグはどこに行ったんだろうねぇ。↑

はい、ここでアンケート！！
どうやって大空戦に持って行こう（泣）
とりあえず大空抜いて8個分。つまり4：4で。
晴れと雷は決まってるのでこの先で。
（嵐は出来れば止めて欲しい。）
お願いします！

入らなかったら自力で考えます。

アンケートじゃない感想も待ってます！

22．王子のティアラ探し♪（前書き）

…絵、載せれるかな…

22．王子のティアラ探し♪

ディーノはキャバッローネ総出で
白川美加の本性を暴こうとしていた。
皆が皆、パソコンなどに集中している。
「ボス！これだ！」
「見つかったか！？」
部下の1人が声を上げるのにディーノは我先にと反応し走ってった。
画面に映し出されたファミリーは…
『ｇｉｆｔファミリー』。
「ギフト…知らないな」
「贈り物？」
何にせよ、波音の話はこれで本当と認めざるを得なかった。
そしてもうひとつ。
「別のファミリーの傘下みたいだ」
「別のファミリー？」

「ああ、『　』ファミリーっていう」

「聞いたことも無いな…そっちは大丈夫だろ」

そのファミリーはもう動いていた…。

さてさて、波音ちゃんぴーんち！

「余所見しないでよ」

ビッ

風を切る音と共に銀色の物体が迫る。

「ぅわぉ」

ひらりと避けながら笑いかける。

「今日とは誰も言ってませんがねぇ…」

「何時って決めた訳でもないでしょ」

「その通りです」

激しい攻防を繰り返しているとは思えない話し合い。
そしてその戦いを見ている者が2人。
シンキングターイム！
…分かったかな？
戦い↓波音と恭弥。
傍観↓ディーノとロマーリオ。
「あの2人と話くらいさせて下さいよ」
「嫌だよ。僕が先なんだから」
「…ディーノに妬いてくれてます？」
「…そんなわけ無いでしょ」
「ですよねー」
遠巻きに見守っている2人は思った。
（（色んな意味で息ぴったりだ…））
波音は先ほどから一度も攻撃せずに避けてばかりで、恭弥は…言わずとも分かるだろう。

そして怪我一つ無いまま2時間は経っている。

汗ばんだカッターシャツがその証拠だろう。

恭弥の場合学ランの下の制服だが、波音はスーツ姿だった。

「戦闘すると分かってたならこんな格好で来なかったんですがね」

「…とどめ」

ビッと風を切りトンファーが波音に迫る。

紙一重でよけた…と思ったがそれは間違いだったようだ。

「ぼくの負け…ですね」

今回の勝敗は、恭弥が少しでも波音に怪我を負わせたら勝ちだった。

そして現に今、波音は避けきれなかったのか頬から血が出ている。

「2人ともお疲れさん」

ロマーリオがタオルを渡してくれたのでありがたく受け取った。

「波音、本気出してくれない？」

「嫌ですよ。疲れるでしょうに」

致死武器（スカーデット）を使えば楽だが…いや、楽とは言い難いか。

「で…ディーノさん、解答は？」

「お前の言うとおりだった」

「じゃあ味方ですね」

「まぁな」

「ん、恭弥ー仲間増えましたよー」

「…ディーノも入れるの」

「だってその方が楽だし…ほら、ちゃんとしたマフィアだし」

「…波音が言うならしょうがないね」

「じゃあ、ディーノ、そしてその者率いるキャバッローネはネロファミリーに協力する、と」

「「ネロファミリー？」」

「僕達のファミリーの名前」

「メンバーはボスがぼく、雲の恭弥、嵐の隼人、霧にクローム髑髏と骸。あと千種と犬ですね」

「…ディーノは大空ね」

「え、あ、あぁ」

と、ノリでうんと言ってしまったディーノ。

「じゃあそれで、宜しくです」

「…おう」

そこに波音が

「恭弥…も聞いてもいっか。白川美加のファミリーは何処なんですか？調べたんでしょう？」

「！…へぇ、あれ、マフィアなんだ？知らなかったな」

「言ってませんでした？あれ、一応ファミリーなんですよ。一応」

「ああ。『ｇｉｆｔファミリー』だ」

「…『ｇｉｆｔ』？」

「贈り物とかいう感じだろ」

「いえ…ロマーリオ。間違ってます。多分」

「「「へ？」」」

波音以外が問うのにサラリと答えた。

「英語じゃなくて…ドイツ語」

「ふぅん…どうして？」

「『ｇｉｆｔ』は確かに英語では『贈り物』。でもそれじゃ普通すぎるから…」

「ドイツ語は何なんだ？」

「ドイツ語では…『毒薬、劇薬』」

「「「っ！！」」」

…気味の悪い名前に一同が黙り込む。

「あ、いえ、ぼくの考え過ぎかも知れませんし…」

波音がその空気に耐えられなくなって言葉を紡ぐ。

「…そうだね、どうでもいいし」

それを察したのか恭弥がそれに乗っかった。

「にしても良く知ってたな」

「へ？」

「獄寺がいじめられてた事」

「そりゃまあ？」

「何だよ、ソレ」

ぐだぐだとした話が続く中、ロマーリオがある事を思い出した。

「なぁボス、アレ、言わなくていいのか？」

「へ？…あぁ、別に大丈夫だろ」

「「…何、それ。僕／ぼくたちにも教えて／下さい」」

「見事にハモったな、お前ら」

「それだけ仲が良いって事で♪」

「…ま、いいや。それっていうのは、そのファミリー、別のファミリーの傘下なんだ」

「！へぇ…そのファミリーの名前は？」

「確か…

『ジェッソファミリー』」

「！？～～～～っ！！」

波音がそのファミリーの名前を聞いた途端に声にならない悲鳴に似たものをあげた。

「っ！波音！？」

顔もみるみるうちに青ざめていく。

「おい、大丈夫か!?」

「…嘘、でしょう?」

ポツンと波音が呟いた。

「「「…?…っ!!」」」

そしてその直後、波音は恭弥に倒れかかって気絶してしまった。

「…ねぇ。どうして波音がここまで驚いてるの」

「俺らにもわかんねぇ…」

「…使えないね」

恭弥は波音を抱えて歩き出した。

「オイ!何処行くんだよ!」

「僕の家。気絶してるなら寝かせておいた方がいいでしょ」

ディーノ達が何かを言っていたが、恭弥は気にせず走っていった。

二時間、いやどれくらい時間がたったのか分からない。
波音は目を覚まさないし、恭弥は波音から離れようとしなかった。

「…ん…？」

「っっ！起きたの？波音」

「恭弥…？…あぁ、ぼく、倒れて…」

「そう。リング戦…だっけ？もう始まってるよ」

「え？あぁ…じゃあ行かないと」

そこで１つ恭弥が質問を投げかけた。

「リング戦って何処でやってるの？」

「……え～っと…」

チラッと時計を覗くと恭弥が原作で行くのもあと少し。
波音はどうせだし一緒に行けばいいや…と思い、

「並中。並盛中学校ですよ」

本当のことを告げた。

「！！！不法侵入者、及び学校破損…」

「あ～破損どころならいいですけどね…」

「行くよ。波音…じゃない、シオン」

「！！ん。でも俺一緒でいいのか？」

「風紀委員でしょ」

「シオンは委員会入ってねぇもん」

「…五月蝿い。行くよ」

「…はいはい」

「返事は一回」

「…はい」

こうして2人は並中に向かった。

22．王子のティアラ探し♪（後書き）

頑張るんだぜ！俺！

23．失くしたのかぁ？（前書き）

キャラ崩壊＆久々のギャグ注意報。

23．失くしたのかぁ？

「ここからだと並中が近いな…」

「あたりまえでしょ。風紀委員長（ぼくのいえ）なんだから」

「…まぁそうだな」

現在二人は恭弥の家から並中に向かっている。

波音はもちろんシオンの格好だが。

「これから恭弥の家から行こうかな…」

「君、一応ヴァリアー側でしょ？」

「だよなー」

補足しておこう。結構なスピードで走っている。

「あ、雷撃隊」

「強いの？」

「めっちゃ雑魚」

「そう。ならシオンに任せるよ」

「一応味方何だけど…いっか」

パァン！

銃声とともに雷撃隊が次々と倒れていく。

「あ、一人逃した。見つかるなー…」

「どうでもいいよ」

「そうかい」

校舎が見えてきた。恭弥が見て一言。

「全員…咬み殺す！！」

「だから破損で済めばいいけどって言ったじゃん」

校舎に入っていく恭弥を溜息混じりに追った。

一方ツナ側では。

「明晩の勝負は雨の守護者の戦いです」

「！」

「この時を待っていたぜぇ。やっとかっさばけるぜぇ」

次の戦いが発表されたところだった。

「失礼する！レヴィ隊長！！」

雷撃隊の逃した奴が入ってきた。

「侵入者です！雷撃隊が次々と…」

「どうしたぁ」

「そ、それが…二人居るんですけど…」

「だから言っただろ？着々と守護者が揃ってきてんだぞ。だが二人…？」

「え？」

「あの…その内一人が…」

「一人がどうしたぁ」

「どんなハエがくるのか楽しみだね」

「うん。誰がハエだ？マーモン」

「僕の学校で何してんの？」

「なっ！シオン！？」

「ヒバリさん！！」

「マーモン、後で覚えとけよー？」

「ムム…」

「はぁ。シオン。僕がここに来た理由は？」

「あーはいはい。え～っと…

『校内への不法侵入及び校舎の破損』…だろ？」

「そう。連帯責任でここにいる全員咬み殺すから」

「なっ！」

「ちょまっ俺も！？」

シオンが吃驚して問いかける。

「もちろん」

「なっ！！なんでだよ！俺壊してない！！」

「連帯責任でしょ」

「今来たばっかだし、一緒に来ただろ！」

「「「「「一緒に！？」」」」」

恭弥とシオン以外が大声を上げる。

「あ…ヤッベー…」

「シオン、君ってそんなにバカだったっけ？」

「ちがっ…わないな」

「あの…ヒバリさん…その…」

恐る恐る沢田が聞く。

「ああ…シオンとの関係かい？」

「あ…はい」

「……（ジッ」

「え！？俺が言うの！？」

「僕知らないよ」

「…んじゃ親友！ってことd「却下」は！？」

「恋びt「ちょっストップ！」…何」

「「「「「「「なるほど」」」」」」」

「納得すんなよ！！」

「だから仲良いんだね、シオン」

「マーモン！！～～～～っ！何してくれる！」

「本当のことでしょ？」

「真顔でいうなっっ！」

「…と、とりあえずオレの部下をやった罪だ！」

「（ムッツリが原作に戻したー）」

「まずは君から咬み殺そうか」

「ヴァリアーだと一番よえぇぜ？」

「シオン、咬み殺されたい？」

「嫌だね」

「できる…！何者なんですか？」

「やつは…」

「「ボンゴレ雲の守護者にして並中風紀委員長雲雀恭弥だ」」

「「「！！」」」

シオンとリボーンの声が重なる。

「おい、シオン、何故俺の声に被せれた」

「…読心術「読心術はきかねぇゾ」…」

「…恭弥、何て言えばいい？」

「僕に振らないで。予知とかでいいでしょ」

「答えてくれるのが嬉しいよ。予知…だって」

「…そうか」

「貴様何枚におろして欲しい！！」

「「「「！！」」」」

「ふうん、次は君？」

「おやめください、守護者同士の場外での乱闘は失格となります」

「なに！！」「やばいよ！」

「まーまー落ち着けってヒバリ。怒んのもわかっけどさ」

「邪魔だよ。僕の前に立たないでくれる」

パンッ！

「そのロン毛はオレの相手なんだ。我慢してくれって」

「「「「「！！」」」」」

「ボンゴレ雨の言うとおりだぜ。恭弥」

「（んん？刀小僧の今の動き……）」

「邪魔する者は何人たりとも咬み殺す」

「やっべ！怒らせちまった…！！」

「はいはい、ストップ」

「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」

何がおきたのか全員が分からなかった。

シオンの声が聞こえた途端

恭弥のトンファーはシオンの手元にあった。

「ちゃおっスヒバリ！」

「赤ん坊かい？」

「ここで暴れちまってもいいがでっけぇお楽しみがなくなるぞ」

「！楽しみ…？」

「今すぐってわけじゃねーがここで我慢して争奪戦で戦えば」

「遠くない未来六道骸と戦えるかもしんねーぞ」

「！！！」

シオンが冷や汗を流す。

脱獄…じゃない、出所したことをばれてはいけない…のだが

「（言うの忘れてたぁぁぁ！）」

「…それは…！！」

『もう叶ってる』と言う前にシオンの姿が眼に入った。

「……本当かな」

「！！」

シオンがホッと息をつく。

「校舎の破損は…」

くるりとシオンの方を向いて

「完全に直るだろうし…気が変わったよ」

「なんで俺を見た、今」

「シオンが直すから」

「「「「「！！！！！？？？？？」」」」」

「んなっ！なんで知って…！！」

「あの時使ってたからね」

「（転校初日か！！！）…分かった」

「「「「「！？！？？」」」」」

周りが驚いているのをほったらかしにしたまま

「僕とやる前にあそこの彼に負けないでね」

恭弥が行ってしまった。

「…（汗…よし。俺も行くわ。皆、俺今日は恭弥んとこ泊まるから」

二人が居なくなってからも暫く静寂が続いた。

～原作通りなのでちょっと飛ばします～

「奴を倒すには流派を超えるしかねぇ」

ここまでは原作通り。これからが問題だ。

「あと…悪りーんだけどさ」

「？」

「オレら第三勢力ってことで！」

「「「「!?」」」」

その言葉にリボーンすら驚く。

「ディーノ、どういうことだ?」

「戦いに参戦する訳じゃねーんだけど…」

ロマーリオが言葉を紡ぐ。

「あるファミリーに協力することになったんだ」

「どこのファミリーだ」

「ファミリーの名前は…『ネロ』」

「!!」

隼人が驚きを隠せずにいる。

「で、その『ネロファミリー』の敵が…その…」

「ボス、言っちまうか?」

「…言って良いのかな…」

PLLLLL

ディーノの携帯がなる。

「！ちょうどいい！…ボス！」

少ししてから携帯を閉じる。

「良いのか？」

「ああ。敵は…『ｇｌｆｔファミリー』なんだ」

「…？ディーノさん、それがどうして第三勢力に？」

「ああ。そのファミリーの次期ボスが『白川美加』なんだ」

「「「！！」」」

「美加ちゃんのファミリー…？」

「まぁ、そういうこった」

「そんな…ディーノさん…」

その後の言葉はディーノ、ロマーリオそして

リボーンもが耳を疑った。

「見損ないました」

「「「！！？」」」

「美加ちゃんの敵になるのなら…俺は敵です」

「オレもだな」

「…そうか。じゃあそこんとこよろしくな」

「……」

リボーンが無言でボルサリーノを深く被る。

「まぁでも、こっちのサポートはするからな！！！」

そうしてその場の人たちは別れた。

では、シオンと恭弥がどうなったか？

それは次回のお楽しみに。

23．失くしたのかぁ？（後書き）

ＰＣの再セットアップ。

をしました。ので、ＰＣが使えるようになりました。

でもテストがちかづいてきたので

次は少し遅れるかと。すみません。

感想待ってます。

24．スクアーロも手伝って下さい（前書き）

お久しぶりです

テストが無事（？）終わりました。

24．スクアーロも手伝って下さい

「恭弥ー！」

後ろからの声に振り向く。

「君も出て来たｎ「波音」…」

「最近また君になって来てません？」

「全員の前で波音って呼ぶよりマシでしょ？」

「…それはダメだ。絶対。…でもな…」

考えてる波音を見て恭弥が思い出したように

「そうそう。波音、あれで良かったよね？」

と、聞いた。

「へ？あれ…？」

「…ハァ。骸の事」

「あぁ！あれマジで助かりました！」

「そう。ならいいよ」

「後、トンファー返しますね」

「ん」

受け取ったハズのトンファーが動かない。

「…何してるの」

「このトンファー結構振り回すの疲れます？」

「知らないな、そんな事」

「…ワォ」

「真似しないでくれる」

軽い言い争いをしながら家に歩いていく。

「ねぇ、何処まで付いて来る気？」

「付いて来るも何も泊まるつもりですが？」

「……は？」

「へ？」

…茫然とした恭弥を揺さぶる。

「……ねぇ、僕だって男なんだけど」

「？知ってますよ、そんな事。何馬鹿にしてるんです」

「いや、そうじゃなくて…」

「？？？」

どうやらそっちの方向は鈍いらしい。

「…分かったよ」

「泊めてくれるんですね！ありがとう♪」

「……（理性が保つといいけどね…）」

「そうと決まったら急ぎましょう！」

「そうだね」

軽い相づちをうちながら笑っている波音を眺める。

「…（可愛い）」

恭弥はとっくにその感情に自覚している。

でも、言ってはあげない。

自分のプライドがそれを許さない。

だから…

「（さっさと僕に惚れてもらうよ？波音）」

「何か言いました？」

「別に？」

「ならいいですけど」

会話しながら恭弥の家に着いた。

「ん。入って…ってさっきもいたね」

「ああ…ですね」

波音は最近良く笑う。

会ってすぐの時はそこまで笑わなかった。

波音は思っていた。

「（仲間って…楽しい）」

それでも波音は未だに信じ切っている訳ではない事を心の何処か感じていた。

「（裏切られたら？）」

考えるだけで寒気がして、泣きそうになる。

「（精神面…弱ってるなぁ…）」

嫌な考え事をしてると、ふいに恭弥の声が聞こえた。

「ご飯とお風呂、どっち先がいい？」

「え？あ…えとご飯先がいいです」

「分かった」

目に入ったのはキッチンに立とうとしてる恭弥。

「！あ、ぼくやります！待ってて下さい！」

「波音、料理出来るの？」

「失礼なっ！料理得意なんです！なめないで下さい！」

「！！分かったよ。冷蔵庫に大体の物入ってるから」

「リクエスト、あります？」

「何でもいい」

「…分かりました！」

波音が居た方に向かう。

過去形だ。現在波音は早くもキッチンに立っている。

自分の部屋に戻って考えた。

「ふぅん…なめないで、ね。僕もなめたわけでは無いんだけど」

前に言っていた言葉を恭弥は思い出した。

「心の底から嬉しい…だっけ？」

あの言葉とその時の表情はどれ程経っても忘れない。

光の無い瞳に薄暗い笑み。

後ろに光る月がそれを際立たせて…

「怖いと同時に…綺麗だった」

自分の言った言葉に驚く。

恐怖は確かに有った。でもそれと同じように

綺麗、と思ったのだ。自嘲と怒りと悲しみと…どれを取っても。

「謎だらけだよね」

校舎は一瞬で直るし、過去は壮絶そうだし…。

「僕が惚れるなんて、さ」

クスリと笑みを零すと、呟いた。

「絶対に惚れてもらうよ、波音。君にはね」

「ん、出来た！」

目の前には綺麗に盛り付けもされたハンバーグ。

「雲雀恭弥と言えばこれですよねー」

自分の目に広がる光景を、笑わずにはいられない。

「フフッ…」

彼を呼ばないと、と波音は道具を片付けながら言う。

「恭弥ー！ご飯出来ましたよー！」

廊下で足音がするから恭弥だろう。

そしてピタリと足音が止まった。

「…ワォ」

道具を片付けているから目は離せない。

「上手いでしょう？」

「予想以上、だね」

「それは良かったです…よし、片付けも終わりましたし食べましょう」

それぞれ向かいの席に座る。

「「いただきます」」

2人が料理を口に入れる。

「……あの」

不意に波音が話した。

「料理…美味しいですか？」

「…美味しいよ」

「！！良かったです」

満足げに食べ進める波音。

「ごちそうさま」

「はやっ！」

「そう？別に普通だけど」

波音はまだ少し残っている。

「食べ終わったら片付けるのでお風呂、入ってて下さい」

「そうするよ。…波音、着替えはどうするの？」

「…あ、忘れてました」

「…はぁ。適当に見繕ってくるよ」

「ありがとうございます」

「別に」

と言って恭弥は何処かに向かった。

食べ終わった波音は食器を片付けていた。

「…何か、楽しい」

『泊まる』というのが凄く楽しいのだ。

何せ初めてだから。

「…～♪」

歌を口ずさみながら片付けをする。

「～♪～～♪」

「…何、歌ってるの」

「あ、恭弥」

「はい、これ」

手渡された物は…

「黒い…Tシャツ？」

「大きめの選んだからワンピース風になると思う…」

「丈は大丈夫そうですし、これでいいですよ」

「そう。じゃあ僕先に入るから」

「じゃあこの辺でゴロゴロしときますね♪」

「はいはい」

歩いていく恭弥の背中を目で追いながらコロリと寝っ転がった。

「…ふぅ」

ため息を吐くのも何度目だろうか。

「疲れたな…何か色んな意味で」

目を瞑って見えるのは昔からのあの時間。

「醜い…んですよ」

ポツリと呟いた言葉も今は空気に溶け込んでしまう。

「……生きる価値を見いだす♪」

何を考えたか急に歌い出した。

「ぼくはもう飽きてしまったんだ　この世界で生きることに～♪」

目を開いた先にあるのは天井。

波音はもう一度目を閉じて歌い出す。

「だから考えてみたんだ、どうすればこの世界を楽しませる事ができる？

『答え』は出ないまま一日を過ごした。

君にあった時、思いついた。素敵な恋は楽しいのか

…結果は真逆だったけど、それでも後悔はしてないからね？

君と生きた時間は楽しかったよ、生きていた中で一番。

現在ぼくは楽しくない。だってさ、君が居ないんだから。

ねぇ、世界を楽しませるには？

『応え』は来ないまま…♪」

歌い終わって重い瞼を開く。

「もう終わり？」

「うわぁぁ！？」

…さっきの天井は無く、恭弥が居た。

「歌、上手いね」

「！！聞いてたんですか！？」

「うん。歌も終わったなら行っておいでよ」

「～～っ…はい」

恥ずかしさなのか薄く赤い色になりながら波音は歩いていった。

「……可愛い」

そう言ってから恭弥は布団を敷き始めた。

……もちろん２人分。

「…よし」

敷き終わった恭弥は座って何かを考えた。

「…そうだ（笑」

笑みを浮かべて言った。

「戦って貰わないとね」

意味があまりよく分からないが。

「あがりましたよー」

声の方に恭弥が振り向くと、案の定ブカブカなTシャツを着た波音がいた。

「っ…似合うね」

「ありがとうございます♪」

「褒めてないよ？」

「え〝」

「嘘だよ」

「な、なんだ…」

「って言うのも嘘」

「えぇぇ！？」

「…クスッ」

「うぅ…恭弥ってSですよね…」

「波音がMなんでs「違います！」そう？」

「うぅー！もう寝ます！」

「布団此処だからね」

「あ、ありがとうございます…恭弥は寝ないんですか？」

「寝るけど？」

「じゃあもう寝ましょうよ！」

「…そうだね」

「♪」

「…やけに機嫌いいね」

「そうですか？」

「うん。凄くね」

「初めてのお泊まりですからねー」

「…そう」

「…聞かないんですね、何も」

「聞いて欲しかったの？」

「いいえ、助かってます」

「…聞きたくない、と言えば確かに嘘になる」

「っ…」

「でも、無理にまで聞く事じゃない」

「！！」

「だから、聞いて欲しい時に、言えるようになった時に聞くよ」

「…ありがとうございます」

「お礼を言われる様な事してないよ」

「言いたいんですよ」

「そう。…そろそろ寝るよ」

「ですね♪」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

2人の寝息が聞こえるのに時間はかからなかったという。

２４．スクアーロも手伝って下さい（後書き）

遅れてすみません。

テストはボロボロですな。見事に
過去最低点を見いだしました。

曲は自分で勝手に作ったやつです。
…歌詞の規制には当てはまらないはず。

遅れてすみません。
感想お待ちしております。

25．特別編！12月5日（前書き）

日にちが…

25．特別編！12月5日

さて、現在地は波音の家。
計6人位の人がいる。
「皆揃いましたね！」
「何で呼び出したの」
「つか俺とロマーリオも？」
「ネロファミリー、ですよね？」
「…そうだな！」
「凪が来ていませんが？」
「呼び出してませんもん。当たり前でしょう」
「ふぅん…分かった。呼び出した意味」
「俺も分かったぜ。波音」
「…あぁ。そういう事ですか」
「あり、もう分かっちゃったんですか」

「え？俺わかんねぇ…」

「ボス…」

ロマーリオも分かったらしい。

「…ディーノ…まぁいいでしょう。今日は凪の誕生日です」

「ああ！」

「と、言うわけで、各自プレゼントと飾り付け買ってくる事！」

「飯とかケーキはどうするんだ？」

「用意はあるんですが…「波音が作るって」え」

「拒否権ないからね」

「…分かりました。不味くなっても知りませんよ」

「君の腕は確かだから大丈夫だよ」

「……じゃあ三時にもう一度ここ集合で！」

「「「「了解」」」」

こうして全員一度別れた。

「骸より恭弥と隼人が先に気付くって…」

一つの疑問を波音に残して。

「…ケーキ作りか…出来るかな」

訂正。２つでした。

「三時になったにもかかわらず…」

「…僕らでやっておく？飾り付け」

「仕方ない、そうしましょう」

現在三時半だが、波音の家に居るのは波音と恭弥のみ。

「プレゼント難しいんですかねぇ…」

「どうでもいいよ」

「そう言えば恭弥直ぐ帰って来ましたよね」

「まぁね」

「プレゼント何なんですか？」

「…秘密。波音は？」

「無難にチョーカーでも」

「…ケーキもだしね」

「ですねー」

注：手はちゃんと動かしています。

「わりぃ。遅れた」

「隼人。…確かに遅いですけど二番なのでおＫです」

「獄寺隼人。さっさと手伝いなよ」

「おぅ」

３人無口に手を動かしていた。

ピロリロリン♪

「「？」」

「ぼくの携帯です」

Ｔｏ：骸

Ｓｕｂ：今

本文：ちょうど黒曜の方まで来たので、６時位に凪を連れてそちらへ向かいます。

「…へぇ」

「…何、人のメール見てるんですか」

「六道は後から来るんだね」

「はい。後は…ディーノ…（イラッ」

「波音、この飾り…ってどうしたんだよ」

「別に？（黒笑」

「…そ、そうか…（汗」

「あ、その飾りはこっちに」

「あ、あぁ」

黒い笑みを浮かべている波音を横目に２人も黙々と仕事をしていた。

そのピリピリした空気の中、

「ただいまー！わりぃ、遅くなったな」

能天気な声が響き、波音は何かがぷつりと切れた。

「……な」

「へ？」

「後で覚えとけよ…ディーノ。分かったな」

「あ、はい」

何故に敬語。

「これ、飾りだ。ボス」

「ん。ありがとうございます♪後、波音でいいですよ？」

「いいんだ」

「…まぁ構いませんけど」

「波音、準備大体終わったよ」

「こっちもだぜ」

「今時刻どれくらいですか？」

「5時ってとこだな」

「時間余りましたね」

「そうだね」

「…どうしましょうか、暇ですよ」

「寝る「却下」…」

「戦う「却下」…」

「遊ぶ「却下」…」

「……はぁ」

「…波音、早めに来て貰えば？」

「ですね…」

ピロリロピロリロ♪

「では皆さんクラッカーを持って！」

ピンポーン

「ぼくは2人の後ろから入りますから！」

玄関に駆けていく。

「2人とも良く来てくれましたね！こっちですよ」

「…うん」

「分かりました」

カチャリと扉を凪が開く…と、同時に

パン！パパン！

「！！」

「「「「「「誕生日おめでとう凪！」」」」」」

「…っあ、あり…がとう…」

「あー泣かない泣かない」

ポロポロと零れ落ちる涙を波音が拭う。

「…私…嬉しい…」

「それは良かった。では此方へ」

コクリと頷きイスに座る。

「さて。パーティーは此処からですよ！」

と、まぁ盛り上がった訳で。

誕生日プレゼントもあげたし

「そろそろお開きですかね」

「ああ…じゃあな」

「さようなら」

「バイバイ、波音」

「じゃーな！」

「ええ、さようなら」

皆帰ってから凪が言った。

「今日は…ありがとう…」

「貴女が喜んでくれたら何よりです」

「またね…」

「えぇ、また」

こうして、無事に凪の誕生日パーティーは終わった。

後日、ディーノが死にかけたのは

言うまでもないか。

26．なんでだぁ！（前書き）

前回ぐだぐただったから
せめてもの償い。

すこぉし長め？

26．なんでだぁ！

先に目を覚ましたのは恭弥。

時間は…午前6時。

風紀の仕事は草壁に任せているので少し遅めに起きた。

「波音…は寝てるね」

波音を起こさない様に起き、恭弥はキッチンに向かった。

「ん…」

良い香りに目を覚ます。

「今…何時だ…」

「6時半。おはよう波音」

自分の何気ない声に返答が返ってきた。

「!?…あ、泊まったんでしたね」

「忘れてたの？」

「少し」

「そう。ご飯出来たからおいでよ」

「分かりました。すぐ行きます」

寝ていた布団を畳んでから、波音はリビングの方に向かった。

「…ワォ」

「真似しないでくれる？」

目の前の朝ご飯に思わず声が出る。

「ほら、席着いて。食べるから」

恭弥に言われ昨日と同じ席に着く。

「「いただきます」」

無言で食べる恭弥にならって波音も無言で食べる。

「ごちそうさま」

「はやい…」

「そう？普通だと思うけど」

「はやいですよ…」

と言っている内に波音も食べ終わり

「ごちそうさま」

と箸を置いた。

「…さて、と」

波音は席を立ち玄関に向かう。

「もう行くの？」

「少し用事があるのでね…あ、恭弥手伝います？」

「手伝いの内容による」

「…あのですねぇ。――――――――」

「…へぇ。手伝うよ」

「ありがとうございます♪」

2人は真っ黒な笑みを浮かべていて、その場は真っ青な朝に似つかわ無かった…。

「あ、来ましたね」

「遅かったぁ？ごめんねぇ～Ｖｖ」

「ハート飛ばさないで下さい。後口調も」

「きゃー美加こわぁ～い」

「…さっさと本題に入りますよ」

「なぁにぃ？」

波音は白川を呼び出していた。

場所はある路地裏。

「どうして隼人をいじめたんですか」

「！！なぁんだ、知ってたんだぁ」

「そりゃあそうでしょう」

「隼人ねぇ～ワタシのタイプなのぉ～」

「（隼人…ドンマイ）」

「このワタシが告白してあげたのに断ったのよぉ？」

「…随分と上から目線ですね」

「ワタシは上だもの」

「…で？」

「だからコマを使ってワタシに逆らうとどうなるか教えてあげたのＶｖ」

「…コマ？」

「ツナ君とか武君の事だよぉ」

「どういう意味ですか」

「だからぁ、皆はワタシのコマなのぉ。ワタシの使い捨てのコ・マＶｖ」

「彼らは人間です。決してコマなんかじゃない！」

「人間はワタシのコマなのぉ」

「…人をそんな風に思ってるなんて…」

「？…！？」

急な殺気に身体が震える白川。

「白川美加…お前は完璧に潰す」

自分に向けられる殺気は波音からの物。

「な…何者よ、アンタ」

「ただの…一般人ですよ」

「…っアンタなんか殺してあげるから！」

そう言って白川は逃げて行った。

「…ふぅ。さて、ちゃんと出来ました？」

その言葉と同時に影から出て来たのは…

「もちろんでしょ」

恭弥だった。

「まさかこんな馬鹿げた事であんな事をしたとは…」

「告白して振られた、ねぇ」

「逆恨みもいいとこですよ。イライラする…」

「波音、殺気漏れてるから」

「すみません」

「別に。にしてもどうしてこんな所選んだの」

「よく見ると…ほら」

波音が指さしたのはある壁。

「…血？」

「そう。…これやったのヴァリアーなんですよね」

「へぇ。それで？」

「まぁ。気分もありますけどねー」

「さて、僕はあの人と戦うけど」

「あ、ぼくも行くところあるので」

「そう。じゃあね」

「さようなら」

「バイバイ」

こうして2人は別れた…「あ、そうそう波音」…ハズだった。

「地の文遮ってまでなんですか」

「これ、忘れ物」

「！！コート！」

「今日も行くんでしょ？」

「まぁ。…それに」

「それに？」

「…来れば分かりますよ、今日」

「…ふぅん」

「ではでは」

今度こそ別れたのだった。

で、波音はというと。

「久しぶりですね、ここも」

黒曜ヘルシーランドに来ていた。

しかも勝手に入っている。

「クフフ…どうしたんですか、波音」

「骸…あれ、クロームは？」

「買い物、だそうですよ」

椅子に座って呑気に話している骸に少し苛立ちを覚える。

「で、波音は何しに来たんです？」

「用件はですね…」

「これが雨の勝負のための戦闘フィールド『アクアリオン』」

「特徴は立体的な構造。そして密閉された空間にとめどなく流れ落ちる大量の水です」

最上階のタンクより散布される水は一階から順々に水位が上がる仕組みだ。

～飛ばします。ごめんね～

「あんまり勝負前に驚かすなってリボーン」

「ディーノさん！」

「山本、お前の勝負見させてもらうぜ」

「うぃっす」

「恭弥も多分見に来てるぜ」

「ヒバリさんもー！？」

「ああ。うちのボスもな」

「！！」

「皆殺しにすれば早いのに」

「仕方ないだろ、こういう掟だ」

「山本武には勝って自分のところまで繋いでもらわないといけませんしね」

「君には言ってないよ」

「クフフ」

「るっせ。黙れナッポー」

「なっ！シオン！僕の何処が果実ですか！」

「「髪型」」

「雲雀恭弥！君もですか！」

「当たり前。声大きいとバレるよ」

「！！」

「あ、円陣」

「馬鹿げてますね」

「…不本意だけど同感だよ」

「同じく」

「…ハァ」

下の暗い雰囲気とは真逆のテンションな屋上。

「『頑張って』って言われるの嫌いなんだよねー俺」

「なんで？」

「こう…頑張ってるのに頑張れって言われるとイラッと？」

「「…」」

「あれ、俺だけ？」

「それでは雨のリング勝負開始！！」

「あ、始まった。宜しくね？骸」

「分かってますよ」

「用事がそんな事とは…」

「そんな事って…（汗」

「シオンの事いじめてるんでしょ？」

「彼らは嵌められた被害者ですよ」

「…そう」

「あ、繁吹き雨（しぶきあめ）だ」

見といて良かった。と、心の中で思う。

「（過負荷ばかりで忘れてたけど異常も貰ってるんですよねー）」

「なら極限太陽（マキシマムキャノン）も見とけば良かったかな」

「何のこと」

「俺の個人の事。聞いても教えない」

「そう」

「それにしても…一方的な訳でもなさそうですね」

「そうだな。ちょっとびっくり」

嘘だがな。シオンは

だって分かってるから。知ってるから。

「あーあ。もうすぐかな？」

戦いも終盤に差しかかる。

鮫特攻（スコントロ・ディ・スクアロ）や、篠突く雨（しのつくあめ）も『観察』できた。

後は…写し雨（うつしあめ）。

「骸、そろそろ準備な。もうすぐだ」

「分かりました」

「終わるんだ」

「あぁ。そっちの勝ちだぜ、ボンゴレ」

「興味ないね」

「あ、きたきた。『写し雨』♪」

「いきますよ」

「おぅ」

サァァァ…と霧が立ち込める。

そして先程と同じ情景…。ただ見ただけなら。

骸、恭弥には見えている。

細いワイヤーに乗ったシオンが。

シオンのするべき事。

それはスクアーロを助ける事だった。

…のだが。

「なっ！？」

目の前の現実は想像と違う物だった。

「おわっ！」

「山本！」

山本までもが…落ちた。

「（原作が変わった…マズい、2人とも助けないと）」

「骸！予定変更。両方助ける！」

「！！わかりました」

「んじゃ、行ってくる」

「「行ってらっしゃい」」

その言葉と共にシオンは真っ逆様に落ちていった。

「ダイナマイトをっ！」

先に落とす。そこで軽く爆発し、空洞…いや、水のみが残る。

骸に言われた言葉。

『助ける相手には誰か分かる』

今、コートは付けているものの、水中だとフードは取れてしまうだろう。

「（山本にはバレるか…仕方ないな、こっちが優先に決まってる）」

ザブン！

音は5人にしか聞こえず、他の人には絶望の色が見える。

チェルベッロは淡々と、どちらも合わなかった。と言った。

シオンは2人と一匹を探す。

…あれだ。赤く染まるその近くの水が居場所を告げていた。

幸い、まだ2人とも無事そうだ。

その場にあった瓦礫を蹴って其方まで行く。

スクアーロも気絶していない。

「スクアーロ！山本！」

水の中だから泡の音しか聞こえないだろう。それで十分だった。

コートに忍ばせていたナイフで手を軽く切る。

鮫はそれに気付き、此方に近寄ってくる。

「（ニヤッ」

そこを…同じナイフで貫いた。

一切の戸惑い無く…だ。

「「！！？」」

2人の驚いてる顔をほったらかしに完全に鮫の息の根を止める。

そして2人の方に近づく。

フードなんて取れている。

波音はもう一度叫んだ。

「スク！山本！息止めてろよ！」

グンと勢いをつけ、2人に一気に近寄ると、服の裾を掴んだ。
お前！と叫ぼうとした山本の口を手で塞ぐ。
更にある方向に進む。その方向には…

「こっちだ！」

ディーノ達がいた。
両手の腕をブンとふり、2人を其方へ投げた。
波音も一回水から出て、「忘れ物、取ってくる」ともう一度入っていった。

「な、なぁ、どうして…」

今まで喋らなかったスクアーロが口を開いた。

「波音とシオンは同一人物だ」

「なっ！」

「もっと言うとボスだしな。俺らの」

「！？」

驚きを隠せない山本の後ろから声が聞こえた。

「貴様ら、話し過ぎた。バカ」

「わ、悪い」

…声の正体は波音。

「おい！お前…」

立ち上がろうとしたその手に波音はある物を投げた。

「水の中に落とし物だ」

「！！これ…リング」

雨のリングだった。

「スクアーロ…負けましたね」

クスクスと笑いながら言う。

「るせぇ！」

「まぁまぁ。傷は…」

パン、と手を叩いて

「治しますから」

と言った頃には既に2人の傷は治っていた。

「「！！」」

「なぁ、どうやるんだよ」

「秘密ですよ」

ふぅ。と息を一つ吐くと波音はフードを被り山本の方を向いた。

「俺が波音な事、仲間に言わないでね」

「誰が聞くと思ってるのな」

「今、言うと沢田の修行に支障をきたすかも知れないじゃん」

「！！」

「作戦、狂うとキツくてねー」

「オレが負けたのは作戦のうちかぁ！」

「負ける気はしてましたから？」

「なっ！」

「山本。今回は完全に此方の負け。それは貴方のものですから」

「…何を企んでるのな」

「何も。でも負けは絶対事項」

「…ちっ」

「ディーノ、スクアーロと山本連れてって。あ、俺がいたのも秘密ね」

シオンは言いたいことを言って何処かに歩いていった。

校舎内に、だ。

「ただいまぁ」

「終わった？」

「ん。傷も治してきた」

「帰りますよ」

「はーい♪」

「今日は自分の家にでも行きなよ」

「うい。明日は骸、頑張れよん★」

「星が黒い気がしますがいいでしょう」

「いいんだ」

「クロームにも言っといてねー」

「分かってますよ。では」

「バイバイ♪」

「じゃあね」

こうして長い雨戦は終わり、次は霧戦となった…。

26．なんでだぁ！（後書き）

撃沈したテストを
ぶっ潰せたらなぁ…と
心の中に入っている零緋。
そこまで落ちてる訳で。最低点…ねぇ…（泣）
平均がねぇ…（泣）

聞きたかったらコメントで聞きたいって言ってね！

あ、美術と音楽は良かったよ♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1798v/

光と闇、それが世界。

2011年12月7日01時54分発行